
木下くん家のエロ猫神さま

FLET'S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木下くん家のエロ猫神さま

【Nコード】

N73300

【作者名】

FLEET・S

【あらすじ】

俺の名前は木下トオル。ある日、猫の神様を拾ったのだが、何故か自分の貞操を守る闘いが始まってしまった。

おいそのエロ猫。剃刀片手に居間で陰を剃るんじゃない。しかも何でパンツ濡れてるんだよ。え？スカートもびちゃびちゃ？何、その情報役に立つの？

作者よ、いい加減に危ない単語の使用を控え……おいおい、

何で俺のズボンのチャックが開いていくんだ？って子猫！？・・・
ま、まさか・・・・・・・・アッ！

第一話 序盤の細かい描写および説明は（前書き）

最初は短いので、適当にご覧ください。

第一話 序盤の細かい描写および説明は

雨の日。

俺、木下トオルは学校帰りに捨て猫を拾った。神社の鳥居の下で。

茶・赤・白の三毛猫ですごぶる可愛いので、猫好きの俺は親にも内緒でしばらく飼うことにした。

そして、新しい飼い主を探すまでの短い間、この猫との生活が始まったのだ。

と思っただが、その猫は実は猫神見習いとかいう奴で、しかも神社に祀ってある神の娘だとかいう話らしい。

名前は猫神子猫^{ねこがみねこ}。本当に猫みたいな名前だった。

子猫は俺のお陰で遂に念願の家出が出来たそうだ。

そこで俺が、神の家出を手伝っただからお礼が欲しい、とか言っ
てしまったので、

「それじゃ、私と結婚します?」

「いや、それはちょっと・・・」

「そんな・・・私、まだ処女ですよ?」

「そういう観点で言ってんじゃないやねんだよ」

「でも私はもう16歳を・・・」

「男は18歳にならないと結婚できないんだ。残念だったな」

「ああなるほど・・・では、あなたが18歳になるまでここで花

嫁修業させてもらいますね？」

なんて会話の末、彼女は俺の家に居座る事になってしまった。

そしてこの日から、子猫から貞操を守る闘いが始まったのだった。

ああ忘れてた。序盤の細かい描写および説明はWEBでどうぞ。

ありません

第二話　そこはお約束ではないのだな（前書き）

パソコンは1ページですが、携帯の場合は一つのネタで1ページになっていきます。テンプを作る効果を狙っていますが、もしかしたら読みにくいかもしれません。

第二話 そこはお約束ではないのだな

子猫が家に来てから三日目。

学校に行っている間に俺の部屋から音がするとか言われたので、これ以上隠し通す事は不可能と思われ、俺は流石に親にも事情を説明した。すると母さんは子猫の居候に快諾したのだった。

母さんの許容範囲の広さを俺は認識する結果となった。

「・・・そうなの。子猫ちゃん、タオルと仲良くしてくださいね」

「はい。仲良くしすぎて出来ちゃうかもしれないですけど」

「何がだ？」

そしてつつこみ担当は俺のようだ。

学校から帰ってくると、当然であるかのようにリビングでくつろいでいる子猫が居た。

ソファの上で猫のようだ。

「おい子猫、何だらしく寝てんだよ」

すると子猫ははっと気が付いて言った。

「すみません。玄関に座って」お帰りなさい、ご飯にする？お風呂

にする？それとも、わ・た・し？』って言うものでしたね」

「お前は俺の何なんだ」

「妻です」

「違うだろ」

「じゃあオナールです」

「悪いが居候は三日目でオナール宣言しないの」

「じゃあ猫だけにオペ」

以下ほぼ同文により略。

「・・・あ、そういえば」

子猫は俺の目の前まで来て、にやりと笑った。

「トオルさんはエッチな本持ってないんですか？」

「あ？急に何だ。まあ持つてはいないが・・・どうしてそんな事を訊く？」

「トオルさんの趣味が知りたくてベッドの下とか探したんですけど、見つからなくて」

「そうかい。そんなことで人の部屋荒らしやがって」

この思春期猫は何ともそういうことに対しての興味が旺盛だ。俺はさして興味は無いんだが。

「なので、私がエッチな本をベッドの下に置いておきました。感想を是非聞きたいので読んでください……いや……使ってください！」

サムズアップ。とびっきりの笑顔だった。

「……迷惑な気遣いをどうもありがとう」

心底うんざりした調子で言ってやった。

その後、子猫が風呂を沸かしてくれたので、俺は勧められるまま入浴した。

この時間、おそらく子猫は夕飯の手伝いでもしていることだろう。

「エロ本は余計だが、それ以外は案外役に立ってるみたいだな」

湯船に浸かって一息吐きながら言う。

「はあ、俺つては何でこんなことになっちまったんだ……
てかどうしてあんな奴が神なんだよ」

するりとエロ単語が出てくる子猫は、神としてはもはや最低な存在
だと思っ。

油断してたら貞操が奪われそうだし、気を付けておかないと。

「そうだ。夕飯の支度が一段落したらあいつ風呂に来るかもしれな
いし、さっさと体洗おう」

と俺が立ち上がった時だった。

「トオルさん。お背中流しに来ましたー」

ああ、もう手遅れだったみたいだ。

躊躇い無くドアが開く。

「……許可くらい得てから入って欲しいんだが」

さりげなく前を隠しつつ言った。

対して子猫の方はバスタオルを体に巻いているだけであつた。

「私達の仲じゃないですか」

「出会ってまだ三日目だが？」

「あれ？そうでしたか？もう馴染んでしまっていました……アソ
コが」

「この三日間お前は何してたんだよ」

ふう、と俺は溜息を吐いてからもう一度子猫を見据えた。

「いいから出ていってくれ」

「何でそんな冷たいことを言うんですか？・・・あ、そうか。何も付けてない方が良かったんですね？」

バスタオルを取ろうとしたので、俺は彼女を制止した。

「全くもって違うから全裸はやめておけ。止まらなくなったらどうする」

「止まらなく・・・？と、タオルさんもなかなか大胆な事をおっしやるんですね・・・えへ、えへへ・・・はあ、はあ・・・」

「うん、だからお前がな？・・・えと、とりあえずこっちに寄らないでもらえるか？」

すでに脱いでしまっていた子猫が落ち着くまでに、ちょっと時間を要した。

それから子猫は、風呂場の椅子を俺の前に置いた。そして珍しそうに眺めている。

「あの、この穴って・・・」

椅子の真ん中に空いている穴を指したものだ。

「座位で行う時に使用

」

「しない。届かない」

何となく言うと思っていたので先に制した。

「じゃあ放　プ

」

「そっちでもねえよ」

もうさっさと上がりたくなってきた。

「では、ここにお座り下さい」

俺は椅子には座ったが、子猫の背中流しは拒否した。

「自分で洗えるからいい」

「私が洗いたいです。これは自分の為なんです。お願いします、やらせてください」

俺の後ろから、力の込もった声が聞こえる。

「やけに真剣だな・・・」

「ええ、そりゃもう男の人の肌に触れられると思ったら真剣にもな
ります」

「お願いだから真剣さの方向変えてくれー」

しかし、このままでは何も進まないと悟った俺は渋々了解すること
にした。

子猫はまずは背中を流し始めた。

「気持ち良いですか？」

「ん、そだな・・・」

そして何も無く背中流しは終了し、俺は安堵の溜息を吐いた。

「それでは、次は前を」

「いや、それはしなくていいって」

それだけは絶対に拒ませてもらう。立ち上がるうとする。

「そう言わずに。私上手いんですよー」

と言って肩を掴んできたので振り払ったところ、

「・・・トオルさんがそういうおつもりでしたら、私にも考えがあ
りますよ??」

椅子の側面が蹴られ、俺を乗せたまま回転する。振り飛ばされそうになったのを何とか堪えると、手で押されて浴場の床に投げ出された。

仰向けに転がる俺。

「いて……………」

「ふふふふふ……………」

見上げると、口を笑みで湛え顔を赤らめた子猫が。

「ま、待ってくれ……………」

俺の制止を無視して上に跨る。

「はあ……………はあ……………」

荒い息で、俺の股間を注視する子猫。

俺は必死で首を振る。

「やめろ……………」

「上手な所、お見せしますね（はあと）」

そして俺の（自主規制）に手を……………！

「やめろおおおおおおおっ！……！！」

「つ……疲れた……」

憔悴し切った俺は、崩れるようにベッドに寝転がった。
天井を眺めていると、ふと気が付いた。

「あ、そういえば子猫がエッチな本を置いておいたと言っていたな。
誰かに見つかったら面倒だし、処分するか」

ベッドの下を覗き込むと、奥の所に見知らぬ何かがあるのが見えた。

「ん、アレだな」

手を入れて引つ張ると、出てきたのはいかにも成人向け雑誌のよう
な大きさの書籍であった。

しかし、カバーがあってそのままでは何の書籍か判別できないよう
になっている。

子猫め……そういう無駄なところは気が利いている。

「あいつ、一体どんな物を買ったんだ？」

と本を開いてみると、

「こ、これは……っ!？」

そこにはなんと、お昼時の日向ぼっこを楽しむ猫の寝姿があった。
え……どういふことだ……?

次のページをめくってみても、同様に猫の写真が掲載されている。
・・・エッチな本とか言っていたが、猫の雑誌だったとは。非常に健全ではないか。

ていうか凄い、ある意味ストライクだ。すばらしい。

驚いた表情でカバーを外すと、これが本当に猫の雑誌である事が判明した。

結果的に、ありがた迷惑が本当にありがたくなってしまったのだ。

「にしても・・・あいつは何でこんな物を・・・」

「ふふ、早速見てますねえトオルさん？」

その声に気が付くと、忍び足で入ってきたのか子猫がベッド脇に立っている。

顔が何だかにやにやしていた。

「やっぱりトオルさんも男の人なんですねえ・・・」

「子猫、何なんだこれは」

「え？それはもちろん、エッチな本ですけど」

当然が如くそう告げられた。

「・・・・・・・・どこが？」

「全てにおいてです。だって猫の全裸が所狭しと載っているじゃないですか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

視線を本に落とす。

「・・・・・・・・まあ、確かにこれは猫の立場から見ただけの工口本だろうけどさ。人間から見たところでこれは工口本にはなり得ないと思う。」

「ということは、だがこれからの子猫のためにも教えてやらなかった。」

「で、子猫はどうして俺を張ってたんだ？」

「あ・・・あれ、バレてました？」

「タイミングが良すぎる。ドアの隙間からこっそり俺の様子を見てたんだろ」

「ずばり言い当てると子猫は、」

「・・・だって、使うかなーって思ったので」

「ならどうして出てきたんだ？」

「良く考えると、一つ屋根の下に私が居るのに実物の方が使われないのって悔しいじゃないですか。だからどうぞ私を使ってください、トオルさん！」

子猫はやる気満々な様子で俺にそう告げた。

力強く歩み寄ってくる。

「体に自信はあります!」

「いや、そう言われても困る」

「ま、まさか未使用は趣味じゃないって言うんですか!」?

「そういうことで困ってんじゃないよ」

処女の主張はもういい。

そう言いながら俺が手に持っていた雑誌を机の上に置くと、子猫は

「あれ、それどうするんですか?」

と訊ねてきた。

俺はベッドに戻って腰掛ける。

「猫の写真は嫌いじゃない。保管しておくんだよ」

「そして、私の見てないところでこっそり使用するんですか……?」

「無いな」

「じゃあ私を……!」?

「もつと無えよ」

何で嬉しそうなんだ。

「むう、そうですか・・・」

やけにがっかりした様子の子猫の横で、俺は布団を被った。子猫が来てから疲れが溜まっている。早く寝ないともたない。

「俺はもう寝る。お前も自分の部屋に戻れ」

「あ、はい・・・・・・・・・・添い寝」

「要らん」

「はう・・・」

子猫は心底落ち込んだ様子で部屋を出て行った。

深夜。安らかな眠りにについている俺。

その俺が寝ている部屋のドアが、音も無く静かに開いて行った。ドアを開けた主の目が、光って見える。

まんまと侵入を許したのに、俺は気が付かず寝続けている。

やがてドアが閉まった。

第三話 破いて良いか？

朝、俺はいつもより早く起きた。

うーん・・・体が熱い。どうやら最近温かいのでその影響みたいだ。と思つて体を起こした瞬間、それが違うのだと気が付いた。

「重い・・・」

何かが俺の腹に乗っかっている。否、子猫が俺の腹の上に乗っかっている。

温かいのはこのせいか。まったく、人の腹の上で寝るなんて本当に猫みたいだな。まあ、猫神らしいけど。

このままでは起きられないので、俺は子猫に声を掛けた。

「おい、子猫」

「んあ・・・何れすか？」

「退いてくれ。起きられない」

と俺が告げると、子猫は自分が俺の腹の上に居る事を認識した。

「ああ、私トオルさんの上で寝ちゃったんですね」

手を丸めて目を擦りながら子猫が起き上がる。

「何で俺の上で　　　　　つてお前・・・」

俺は頭に手を当てて首を振った。

「はぁ……何でお前は裸なんだ？」

今まで髪に隠れてて分からなかったが、子猫は全裸だった。子猫は何でもないことのように答える。

「え……？あぁ、熱いと思って脱ぎました。ほらそこに服あるじゃないですか」

見ると脱ぎ捨てられた服と下着がある。

「えへ、すみません無造作で……まるでシたみたいですよね？」

「言っと思ったよ」

でも俺服着てるけどな。

「あ、タオルさん私のせいですごい汗掻いています。舐めて差し上げますよ」

「そんなモーニングサービスは要求してない」

首元に沿うように寄ってきた彼女を、俺は腕で押し退けた。

「モーニングサービス……ですか。だったらこっちの方がメジヤーなのでは？」

そう言つて次は俺の下半身に顔を向けた。

「……………分かったからこつち見る。下をぺろつと出すな。」

「えへ、朝 ちしてますね。処理しましょうか？」

「……………こんなの放つておけば治まるようなただの生理現象だ。それに、そんなモーニングサービスはこの世界でもメジャーじゃない」

「中ですか？外ですか？私は中を希望します」

ズポンを掴んだ。声が興奮交じりに嬉々としている。

「いや待て、その二択はただの恐喝にしかなくてな っていいから脱がせるなああっ！」

22

「おはよ、トオ うわっ、何か怖い顔してるぞお前！？」

「おお……………ちよつと、な」

「そつか、大変だな。……………おっと、俺日直だったんだ！先に行くわ！」

「ん……………」

元気良く挨拶してきたクラスメイトに無気力な返事を行いつつ、俺は学校に向かっていた。

あの猫、腕力が想像以上に強い。お陰で抜け出すのにかなりの力を使ってしまった。

部屋のドアに、鍵を取り付けよう。

俺はそう決意した。

教室に入って自分の席に座ると、

「トオルくん、何か疲れた顔してるよ？どうしたの？」

と前の席に居る鏡京子かがみきょうこも声を掛けてきた。

黒髪のおさげが良く似合うクラスメイト。年中ニコニコしてるのが特徴といえば特徴だ。

こいつにだけは、朝から猫とのくんずぼぐれつを演じてたんだ、とか絶対に言えないので、

「夜遅くまで勉強をしててな・・・」

「そうなんだー、大変だね」

と当たり障りのないことを言ったところ、鏡は納得してくれたようだった。

ううむ、やはり鏡は素直で思いやりのある良い奴だなあ。と俺は思う。

「性的な勉強してて、ついつい自家発電しちゃったんだね。男の子って本当に大変だよな」

「心配してもらって悪いんだけど、違うから」

・・・でも、こういう奴だった。

昼休み、鏡がまた話しかけてきた。

「そういえばトオルくん、トオルくんの髪の毛にこんなものが付いてたよ？」

と言つて、指で抓んでいる何かを俺に差し出した。

「何だ？」

・・・ただの長い髪の毛だ。

「女の人の髪の毛。しかも茶色」

「・・・・・・・・・・」

茶色・・・ああ、アイツのか・・・・・・・・
無言でいると、鏡は俺の顔を覗きこんだ。

「誰の？」

「それは・・・・・・・・たぶん母親のだな」

「お母さんは黒かったよね」

何で知ってる。

「……彼女？」

「居ないよ、そんなの。きっとその辺の女子のが付いたんだろ」

「まあそうかもね。でも最初何で嘔吐いたの？」

「……」

俺は沈黙を深めた。

鏡は、そんな俺に対して珍しく威圧的に詰め寄った。

「それは、トオルくんがこれが実は誰のなのか知ってたからじゃないの？だからそれを隠そうとした……違う？」

く……どうやら鏡は勘が鋭いようだ。だが言うわけにはいかない。俺はあんなイレギュラーな存在をほいほいと言いふらせるほど口が軽くないのだ。

それに、それを言った後の鏡の反応が非常に怖い。

「分かった！この髪の毛の主」

何を言おうか悩んでいる所で、鏡が閃いた。表情が明るく変化する。

「セレってやつだね？それなら彼女じゃないよ。どう？」

「……髪の毛一本でそこまで想像できるお前はホント凄いや」

仕方無いので購買のパンを買ってやって、それ以上の言及を止めてもらった。

家に帰った俺はすぐ、今日出ていた日本史の宿題に取り掛かった。小脇には、子猫が控えている。

「何してるんですか？」

「見て分からないか、宿題してるんだよ」

「宿題って、学校から出るあの・・・」

と頭を捻って思い出しながら続けた。

「えーっと・・・」次の授業が終わるまで、そのバブを外さないで居るんだ』『そんなの・・・無理です・・・』『ふはは、イカないように我慢してるところを皆に見てもらうんだな。それとも、見られたらむしろ興奮するか？ふはははっ』って感じで先生から出される課題のことですよね？」

「前々から思ってたけど、お前のその知識は何処からの物なんだ？」

どちらにせよ、ろくな情報源ではなさそうだった。

「今は江戸時代をしてるんですね」

教科書を覗き込んで、子猫は興味深げに言った。

「私は江戸時代好きですね」

「何でだ？」

と俺が訊ねると、

「だって、エロ時代ですよ？」

と満面の笑みで答えられた。

「とりあえず、江戸時代の人たちに謝ってやってくれ」

数多くの偉人達がエロで括られた哀しき瞬間に、俺はそれだけしか
言えなくなつた。

子猫はそれからもしばらく一緒に教科書を読んでいた。
漫画でも読んでいるみたいに楽しそうだ。

「勉強つて楽しいですね」

ふと、子猫はそう語りかけてきた。
子猫の方を見ず、俺は聞き返した。

「そうか？俺にとっては面倒なだけだ。毎日学校で勉強して、しかも勉強している全てが将来直接的に役に立つ人間なんて、所詮一握りしかないしな」

「でも、学校で学ぶってというのは魅力的です」

「あ……」

「今まで勉強は家族に教えてもらってましたし、同級生なんていうのも居ませんでしたし」

「……そうか」

神だから仕方が無いとは言え、そんな人並みの経験も味わえなかったのか。

中途半端に人の生活に足を踏み入れたために、俺が踏み入れさせてしまったために、学校の現実性を子猫に感じさせてしまった。

少し、申し訳無い気分になった。

「お前は、学校がどんな所か知らないんだもんな……」

「はい。だから私、学校に行きたいです」

懇願する子猫の表情からはひしひしと真剣さが伝わってきたが、俺は首を横に振った。

「出来ればそうしてやりたいが……駄目だ。どんなことが起こるか分からない」

「そんな・・・精々放課後の教室でクラスメイトと密会する程度です。安心してください」

「・・・・・・・・今の発言内の何処に安心できる要素があった？」

「・・・やはり、色んな意味でこいつは学校に通わせる事は出来ないな。」

「駄目だ駄目だ。お前の正体がバレても大変だし、しかも転入するのがまず難しいだろうからな」

「まあそう言うと思って、もう転入手続きを済ませておきました。トオルさんと同じクラスにしてもらいましたからね」

「・・・・・・・・え？」

「ば、馬鹿な・・・お前のような奴が入れるわけ」

そう言うのと、俺の目の前に紙が提示された。

そこには、子猫の転入が許可された旨が書かれていて、

「見習いであっても神は神、ということでしょうか。ちよろかったです」

「・・・・・・・・この紙、破いて良いか？」

俺は怒りのあまり、紙を掴んだまま神に訊ねた。

「良いですけど、私の膜も破いてもらいますよ」

「……………」

諦めた。

第四話 もつと言え！

翌日。学校。

俺の顔は驚愕で歪んでいた。

「うあ、マジで転入してきやがった……」

黒と言うか、どちらかと言うとむしろ濃緑な色の板（通称、『黒板』の名で通っている）に白い字で『猫神子猫』の名があった。もちろん、教壇には子猫が立っている。

そして同時に、俺はこの世界の理不尽さに呆れ返っていた。

しかも、子猫の席は俺の隣のようだ。どういう根回しか、隣に居たはずのクラスメイトは他の席に移動していた。

子猫は嬉々として隣に着席。自身が注目を浴びているのに気が付かないままに言葉を交わそうとしてくる。

「トオルさん、よろしくお願いします（はあと）」

「は？お前は誰だ？いきなり話し掛けるな馴れ馴れしい」

「……そんなこと言ってたらバラしますよ？私とトオルさんの肉体関係を」

「そんな物は無い」

きつと、こんな感じで学校生活も狂わされていくのだろう。

俺は、観念した様子でそう思った。

授業の合間の休み時間。不意に俺の席に鏡が近付いて来た。
俺の隣の子猫を指して言う。

「ねえ、トオルくん。この子ってキミの従兄妹なんだって？」

「ん？ああそうだけど？」

子猫は、この学校では俺の従兄妹という設定にした。そうでもしないと関係を変に疑われてしまう。

「この子は何処に住んでるの？もしかしてトオルくんの家？」

「家？」

俺はふと考えた。

ここで俺の家と言ったら大変だな、と。何しろ鏡だ。

「そんな訳無いだろう？こいつの家は近所にあるだけだ。でも、何でそんなことをわざわざ俺に訊くんのだ？」

「だって、そうだったら毎日お楽しみなのではないかと思って」

「・・・は？」

首を傾げた俺に、

「だから、一つ屋根の下の男女が每晚開催するカーニヴァルを夢想

してねー、あは」

カーニヴァル。意味：？（カトリック教会で）謝肉祭　？仮装行列
やにぎやかな音楽にあわせた踊りなどを伴う催し。　旺文社　国語
辞典　第十版より抜粋。

もちろん、鏡の中ではそのどちらの意味でも無いのだろう。

「はぁ・・・お前の妄想力って、何か呆れを通り越して感動できる
な」

「やだなあ、褒めても濡れないぞ」

「うん、そんな期待してない」

斬新過ぎる鏡の応答だった。

「でも、これは誰もがする妄想だと思っよ？」

「何で？」

「だってこの前の髪の毛、彼女でしょ？」

俺はその質問に答えずに鏡を睨んだ。

な、こいつ・・・この前の話をこんな所で・・・

「ごめんごめん。でもさー、やっぱ二人の関係気になっちゃっやうな」

「だから俺達は従兄妹で……」

「本当にそれだけ？」

鏡の言葉に反応し、今まで大人しかった子猫が誇らしげに口を開いた。

「もちろん、そんなものなんかじゃありませんよ」

「お前は喋るな」

と俺が口を封じたのだが、鏡は興味深げに子猫に問い掛け続けた。

「へえ……どんな関係なの？是非教えて欲しいなあ」

「えと……実はもう作っちゃったりとかもしてるんです」

……ふむ、ああ夕飯をだね？

「うっそ……それは……トオルくん、ずいぶんと進んでるねえ……」

鏡は驚いた顔で俺を見て、わー、と口を開けていたが、やがて神妙に言った。

「でも、まだ二人は高校生で……そう。これからきつと大変だと思っけど、頑張ってね子猫ちゃん」

「はい……私、屈しません」

・・・うん、たまねぎにかな。

猫と同じく、子猫はたまねぎが駄目らしい。

というか待て。会話が噛み合わずにあらぬ方向へと進んでいる。

鏡は俺と子猫を見比べて、顔を下げて小さく呻く。

「避妊・・・」

「え？」

俺が訊ねたところで鏡はがばりと顔を上げて、

「私はしなきゃ！生まれてくる子のためにも！！」

「お、おい待て！勘違いしたままどっか行こうとするな

あいつ、変な噂とか流さないよな・・・」

去って行く鏡の背中に呟いた俺に、子猫はさらりと言った。

「別に私はいいですけどね。公然と出来るじゃないですか」

「言ってみろ、何がだ」

「ナニです」

「死ね」

今までに無く殺意を込めて言っちゃっても、

「えへへ」

なんてすつとぼけるのがこいつだ。

もう説得は諦めるしかないと思った。

昼休み、俺達は弁当を食った後校内を回っていた。

理由は簡単。子猫の案内だ。

こいつに学校の中を説明しながら回っている。

「……………ていうか、クラス委員長とかがやるもんだろ？こいついの。

俺に仕事が終わって来るなんて……………こいつに一目惚れした男子生徒がアプローチにと案内役を申し出、それから二人の関係が始まっていく。そして子猫は俺の下を去る……………何故こうならない。

至極面倒そうに、俺はゆるゆる説明をしていた。

「ここが第一体育館だ。体育館はこの他に第二体育館がある」

説明を受けながら、子猫は辺りを見回していた。

「ぐくじ……………」

と隣から生唾を飲み込む音が聞こえた。

「……………どうした？」

「どんな体位が私を待っているんでしょう……………」

「え？何言ってるんだ？」

子猫が顔を赤らめる。

「体位……………区間……………」

……………体位区間。とそこで認識が付いていけた。

あ、こいつ馬鹿だ。

「そういえば、体育館倉庫ってどこなんですか？」

子猫がそう言うので、仕方なく俺は案内してやった。

「ここだが……………」

「へ……………中見ても良いですか？」

「鍵が無いと難しいな」

と俺が答えると、子猫は目を伏せた。

「そうですね・・・残念です」

「どうかしたのか？」

「体育館倉庫・・・良い響きですよ。何かいやらしいので」

「そんなのお前の頭が生み出した偏見だ」

「どこか汗臭い空間の中で、二人は昼間にも関わらずこれまた汗臭いマットを使って夜の激しいスポーツを・・・」

「もう黙ってくれ」

さっさと次に行こう。

「で、保健室はここにある。体調が優れなかったり怪我したらここに来い」

保健室の前で、俺はそう加えて歩き出そうとしたが・・・

「私知ってますよ。ここにはベッドがあるんですよ？」

「そうだけど・・・」

「楽しみですね？」

「何の同意か知らんが求めるな」

「・・・襲えと?」

「違う」

何とも恐ろしいご都合的な解釈だった。

「俺は、怪我したら来い、って言ったぞ」

「汚したら来い、ですか」

俺は顔を顰めた。

う、いやだが・・・今回はグレーゾーンか?

「なるほど・・・では、汚された人はどうすれば良いんですか? 純白を散らされた乙女達にはどんな救済があるって言うんですか?」

はは、やっぱり黒だったぜ。

俺はとりあえずその場を苦笑いで乗り切った。

一通り案内し終えて俺達は廊下を歩いていた。

最後の案内がB棟(この学校ではホームルームのあるA棟と、物理教室などの特別教室があるB棟に分かれている)の社会科教室だっ

たので、人通りがほとんど無く静かだ。

「今日はありがとうございました、トオルさん」

「面倒だったが、まあしょうがないしな」

と溜息を吐く俺の横顔を、子猫はしばらく眺めていた。やがて、子猫は俺との距離をぐつと詰める。

「これからの学校生活が楽しみです」

そう言っつて、体を密着させてきた。

「……何だ急に？」

振りほどこうとした俺の腕は、しかし子猫に掴まれていた。

引き寄せられた反動で、俺は先ほどよりも子猫に近付く。

と思った瞬間、再び俺の体は子猫から離れていて

後頭部に鈍い痛みを覚えながら目を開けると、体は仰向けに倒れており、俺の上に跨った子猫の悪戯そうな顔がすぐそこにあった。

顔はさらにゆっくりと近付く。

「……今日のご褒美ですよ、トオルさん」

「くっ……や、止める……！」

身じろいだが、がちりとホールドされているのでなかなか脱出できそうに無い。

「どこまでしたいですか？」

甘く問い掛けてくる。息が頬を優しく撫でた。

何時人が来るか分からない状況ゆえの焦りと何故か込み上げる微かな高揚で、俺は呻き声を上げた。痛み of せい か頭も上手く働かない。

「キスでは満足できませんよね？ やっぱりここは私の（自主規制）で気持ち良くなってもらわないと。いえ、ここはバリエーション豊富に正位・騎位・後位と、もっと言えば

「もっと言わんで良い」

「あう……」

つつこみも程よく出るようになるくらいには頭も何とか正常に働き始めたので、いい加減に本気で離れようかとした時だった。

「そこの二人！何をしているっ！」

凜とした女の声が廊下の向こうから木霊した。

声の方を向くと、そこには二年生の秋元千鶴あきもとちづるが居た。

秋元千鶴 成績優秀、容姿端麗、運動も出来て人望もある
女子高生。

加えて彼女は生徒会長。もっと言えば、校則を振りかざし生徒を虐げている頭目だ。

「あーあ、何でもこういう時に限って・・・」

今の状況で出てくるキャラとしては最悪だった。
子猫も状況を理解し、俺の体を放した。
起き上がり、今さら身構える。

「お前達、今ここで何をしていた？」

案の定、一連のやりとりを見ていたのかそう訊ねてくる始末。
その二つの切れ長の目に威圧され、俺は呻き声をあげた。

「言えないというのか・・・そうか、では私がはっきりと言ってやるう。お前達は今」

と一呼吸を置いて、秋元はこちらを指差し黒の長髪を翻しながら言った。

「異性交遊していた！！それもかなり不純な！校内では禁止になっているのだろ！！」

ぐあああつ！・・・つと言いたいところだが、生憎と俺にはそんな気は全く無いのでこう言い返す。

「違いますよ。これはこいつが無理矢理」

「何っ！？校内で逆レプだと！！？」

「んなわけねえだろ」

俺の言葉を遮った生徒会長の絶叫に、俺はなるべく淑やかにかつ敬語無くして言っちゃった。

子猫が前に出て一言言っ。

「そうです。それにこれは和姦です」

「子猫、口塞ぐぞ?」

「な……くく、口を塞いで監禁プレイもするのかッ!? もっと言えば」

「お前ももっと言わんで良い」

生徒会長、秋元千鶴。

ああ……何かまた変な奴が出てきたようです。

第四話 もつと言え！（後書き）

更新遅れて本当に申し訳ありません・・・

第五話 ふつぶ、おぬしも悪よのう・・・

生徒会長秋元千鶴は、未だ俺たちと対峙していた。

「お前達・・・中々手強いな・・・この私がかここまで追いつめられるとは・・・」

「あなたもやりますね・・・この猫神（見習い）である私に本気を
出させるなんて・・・」

二人の拮抗した力は、辺りの空気を張り詰めさせていた。

「もう一度言うぞ・・・私を認めるんだ・・・」

秋元はそう言って一歩前に出た。

「あなたを認めたら、私は・・・私は・・・っ!!」

子猫もそう言いながら一歩踏み出す。

そのちょうど中間点で、俺は呆けていた。
場の空気にはそぐわない表情で。

「あのー、第四話と話の流れが微妙に繋がってないような・・・」

と俺は言ってみたが、聞く耳を持つ者は誰一人として居なかった。

「逆レ プだったんだろ！いいから認めろっ!!」

「合意の下です！断じて逆レ プではありません!!」

そして俺はもう一度言う。二人の拮抗したエロス力は、^{パワー}辺りの空気を張り詰めさせていた。

って要らん！そんな力は！（あ、そういえば合意の下でもない）

俺はそう思いつつも何も出来ず、腕を組んで二人の闘いの行く末を見るだけだった。

そこに割り込む、本日二度目の

「そこの二人！何をしてるの！！」

という制止の叫び声。

見ると、セミロングの真っ白い髪の毛をポニーテールにしている女子高生が居る。

目は穏やかな垂れ目気味だが、今は怒りからか少し鋭い。

左腕には、風紀委員の腕章があった。

「今度は風紀委員か・・・」

誰にとも無く俺が呟く。

「校内での風紀を乱す行為は駄目よ？」

柔和なのだが、どこか従う必要性を感じる声色だった。それを受け、秋元が弁解を口にする。

「ゆ、由紀さ……あ、いや由紀。そのこれは、こいつらが異性間交遊を行ってて、だな」

名前を呼び慌てている様子から、二人には何かしらの関係があるようだ。

だが、秋元のあの態度は何か違和感が……

「だからって、あなたがこんなことをしちゃ駄目じゃない」

「そう、だな……自分を見失っていたことは認めよう」

「……ねえ千鶴、あとは私に任せてくれないかしら？」

そして、秋元の耳元で何かを囁いた。

秋元の双眸が僅かに大きく見開かれ、やがて平静を取り戻す。

「うむ……分かった、頼む」

秋元はそう言っておずおずと子猫の前から退いた。

それと入れ替わるように由紀と呼ばれた女は近付いていく。

「こんにちは、私は葛西由紀^{かさい ゆき}。風紀委員長をやってるわ」

「どうも、猫神子猫です」

子猫は警戒しつつ葛西に返事をした。

葛西は子猫に優しく微笑むと、

「子猫さん、今度からは気を付けてね？校内じゃなければ好きにしても咎められないから」

そう言っつて、ね？と同意を求めてきた。

「は、はい……」

と思いのほか相手の対応が良かったので、子猫も拍子抜けしたようだった。

「そうだ！アルセ　クスも良いんですか？」

「もちろん自由よ。野外露出プレイも寧ろ誘致したいくらいだわ」

「猥褻物陳列罪つてありますよねー」

うふふ、と笑いながらすごいことを言っているの、とりあえず嗜めた。

そこで俺が葛西に歩を進めた。

先ほどの葛西と秋元との会話の中で気になっていたことを質問するためだ。

「えーっと、由紀先輩。一年の木下トオルといいます」

「何かしら？」

「由紀先輩は、千鶴先輩とどういう関係なんですか？あの生徒会長秋元千鶴が急に大人しくなりましたが……」

小声で俺がそう訊ねると、葛西はころころと笑った。とても柔らかい笑顔に緊張感が削がれる。

「ふふ、私はただの友達」

「はぁ・・・そう、ですか」

そうか、良かった。この人は大丈夫な人なんだな。ただ仲が良いとかそんなところか。

俺がそう思って安堵した、その瞬間だった。

「人には言えない秘密で恐喝して無理矢理作った良好な友人関係よ」

「へえく・・・」

・・・あれっ？

葛西は黒かった。

家に帰ると、俺はベッドに寝転がった。

何せ今日は、子猫が転校してくるわ、秋元に目を付けられるわ、仕舞いには葛西なんていう生徒会長を恐喝してる恐ろしい先輩にも出会っちまうわで・・・
はぁ・・・本当に疲れた。

目を閉じると、部屋のドアが開いた音がした。子猫だ。

「トオルさん、お疲れみたいですわね……そうだ！」

そこで子猫は何かを閃いたようで、すぐに自室に戻って行った。ドアを閉めるのも面倒なので、俺はそのまま眠りに就こうとする。が、素早く戻ってきた子猫がこんなことを言い始めた。

「あの……トオルさん」

「……………ん？」

「疲れてるんだったら私が癒してあげるっ！えっと、男の人は胸でしてもらうのが好きなんですよ？」

「……………」

ああ疲れてるな。今はお前にな。

「あれ？駄目なのかな……？ん……じゃあ。ほら犬、私の足で気持ちよくしてあげるからそこになおきなさい」

猫に犬言われたくねえ。

「ううー……………お、お姉さんが優しくご奉仕しちゃうわよ……うふ（はあと）」

おやすみ。

俺は寝た。

「・・・トオルさん。その、寝ないでください。せつかく私が心を込めた奉仕をさせていただこうと思っっているのに」

拗ねた口調で、子猫は俺に言葉を掛けた。

「・・・だったら、俺を寝かせてくれ」

「あ、添い寝」

「要らん」

「淫乱！？ありがとうございます！！」

「その聞き間違いも喜び方もちょっと無いな」

「はう・・・」

厳しいつつこみに子猫は唸った。

「第一、その意味不明な台詞たちはどこから持ってきた？」

「あ、それは鏡さんに貸していただいたこの同人誌からで」

と子猫が取り出した書籍を見ると、成人向け、と書いてある。

鏡は死刑だ。

「定期的に貸してくれるそうなので、私としてはすごく楽しみです」

まったく・・・十分淫乱なこの猫に、さらに何を与えようというのだ。
そして暗に、あいつが俺たちの関係に気付いている、ということも分かってしまうわけで。

「・・・はあ」

俺は力無く溜息を吐いては、首を軽く振ったのだった。
子猫の方はまだ何か用があるみたいだったが、

「それで、私は密かに・・・その、していただきたい・・・とか思ってるわけで」

「『密かに』だったら、俺はここまで苦労しねえんだよ!」

その台詞を最後に、俺から怒鳴られ部屋を飛び出したのだった。

第六話 むにゅ

朝、俺は健やかな天候の中起きた。

今日は久しぶりの休日だ。家でのんびり出来そう。

だから、俺は滑らかに二度寝へとシフトチェンジした。

「トオル。今日はちょっと、お隣さんと新しく出来たショッピングモールまで買い物に行ってくるわー」

と思いきや、なんていう風に母さんから離脱宣言がなされ、俺は耳を疑った。

「……………え？」

最近出来たというショッピングモール。郊外に位置するそこは、広大な商業空間が広がっていると聞く。

すぐに帰ってこられるということは無いだろう。

と、いうことは…………

「んあ…………？」

俺の上で丸まって気分良さ気に寝ている子猫が、言葉に反応して起き上がった。

「…………新しい…………ショッピングモール……………」

そこで遅ればせながら理解できたのか、彼女はふと覚醒した。がばっ、と俺に抱きつく。こいつ、また裸だ。

「てことは、しばらくの間二人つきりですね！」

嬉しそうにそんなことを言ってきて来やがる。

だが事実、どうやらそうなってしまつらしい。

「はあはあ・・・トオルさぁん・・・Hなことしましょつよぉ」

・・・どうしたものか。

俺は子猫を何とか退けて、急いで一階に下りた。

朝食は用意してあったがその横には、

『昼はどこかに食べに行つて来てね？それと、夕飯までに帰ってくるから・・・それまで楽しんでても良いのよ？』

そういうことが書かれた置手紙があった。

「・・・・・・・・」

ワナワナと震える手で手紙を拾い上げる。

「楽しめるわけないだろ・・・」

「え？何をです？」

と手紙を覗き込んだ子猫が、

「まあ！お母様も公認ですよ！」

と喜び叫んだ。

そして俺の腕を引っ張る。

「こうしては居られません。すぐに朝食を・・・」

「じゃあテーブルに向かおう。何故居間から出ようとしているんだ？朝食ならあそこにあるぞ」

「違います・・・今日の朝食は私です！」

「うわー、言い切ったこいつをどうしよう」

興奮して仕方無いので、俺は子猫を縄で縛って無力化した後に悠々と朝食をたいらげた。

「トオルさん・・・つまらないです」

縄で縛られている子猫は、居間でテレビを見ている俺に向かって言った。

「今日は誰も居ないからな。理性が吹っ飛んでるお前と居ると、何をされるか分かったもんじゃない」

「ぐす・・・縄で縛っておいて甚振らないなんて・・・虐めないな

んて………退屈です。………はっ！まさか放置プレイ
ですかっ！？何だか興奮してきました！」

「ああ、頭のネジも吹っ飛んでるな」

もっごう勝手にどうぞ。

未だ子猫を無視してテレビを見続ける俺。

テレビには、ファッション関連の番組が流れていた。

別に俺の趣味というわけではないが、特にこれといって見たい番組
があるわけでもないのでチャンネルも変えずにぼーっと見ていた。

「わー、可愛い服ですねー」

と番組に反応して、子猫がそう感想を呟いた。

「あ……そうか、お前に服とか買ってやってなかったか」

俺は今の言葉から、そのことを思い出していた。

母さんからは、今度買ってきてあげなさい、と言われていた。が、
行く機会が無かったために延期を続けていたのだった。正直な話、
面倒だったからでもある。

もしかして、そのために母さんはショッピングモールに？

じゃあ向こうが買ってくれた方が楽そうだし、別に俺がわざわざ行
く必要も無いか。

と思った刹那、後ろで縄の切れる音がした。

「……………ん？」

嫌な予感がするよ？

「はは……嘘だろ？」

俺が振り向くと、息を荒立てた子猫が立っている。

抜け出された……！

「はあ……はあ……はああは、あはは、あははははっ！」

回避不能なまでの早さで接近し思い切り抱き付いてきて、俺の自由を奪おうと手足を絡めとる。

逃げる事が出来ずに床に伏した俺の上で、一匹の野獣になった子猫が目を光らせていた。

「えへへへへ、もう逃げられませんよ……今日は楽しみましょう？」

逃げることは……出来ない。それは確かそうなことだった。どうする？俺はどうすれば……？

必死な頭で、先ほどのテレビを見ている子猫の様子を思い出した。

「……そ、そうだ。子猫、ふふ、服買いに行こう。な？」

俺が慌てて言うと、子猫は荒立てていた息を少し落ち着かせて、

「え？本当ですか？・・・抜け出すための嘘じゃないですよね？」
しかしまだ力を抜いてはくれない。

「違う違う、母さんから渡されてた金もちゃんとする」

俺が必死で伝えると、子猫はようやく俺の束縛を解いたのだった。

「じゃあ私、すぐに用意してきますっ！」

と子猫は嬉々として階段を駆け上がっていく。

「ああ・・・マジで犯されるかと思った・・・」

一方俺は、とりあえず危険から脱した事に安堵の息を吐いたのだった。

母さんに子猫の服を買いに行く事を連絡して、俺と子猫は街に出た。

「しかし、何を買ったものか・・・」

俺がそう途方に暮れていると、

「いつまでもお母様のお借りするのもしけませんし、ここは一気に必要な物を揃えてしましましょう」

「まあでも、俺は服そんなに持つ気無いから。疲れるし」

「でも………下着とかも、欲しいですよ？」

子猫はそう意味深げに言っつて、俺の顔を覗きこんだ。

「………」

チラ、チラ……

子猫がこちらの様子を窺っている。

「………だからって持つわけじゃねえからな」

期待すんじゃない。

俺たちがどの店に入ろうか悩んでいると、

「んー？そこにいるのはもしかして……トオルくんと子猫ちゃんじゃない？」

そんな声が聞こえて俺たちは足を止めた。

見ると、そこには私服姿の鏡が。

プリーツスカートにTシャツを組み合わせ、涼しげな格好だった。

「鏡……？」

何してるんだ？と問い掛けようとした所で、逆に問われた。

「こんな所で何してるの？」

「ああ・・・えっと」

言い淀むと、鏡は俺たちを見て躊躇無く大声で言い放つ。

「分かった！昼間から青　ンでもしに行くんだね！」

「お前は発想がぶっ飛んでるな」

およそ、街の中で言っているいい単語の域を超えていた。

「子猫に街を案内してやってるんだよ。それに服も買いたいって言うからさ。近所だし、従兄妹だから仕方なくだけど」

「・・・ふーん」

さして納得していない様子で、しかし鏡は俺たちに合流した。どうやら、せつかくだからと服を買うのを手伝ってくれるらしい。

「子猫ちゃんには色々と似合いそうだからな」。これは腕が鳴るねえ」

気味の悪い笑みを浮かべる鏡と共に、俺たちは店内に入った。まずは、普段着からだそうだ。

「質素な感じから行ってみよー」

と鏡の指示で、まずは白のワンピースを着て試着室から出てきた。

「トオルくん、どう？犯したくなる？」

「あれれ、審査基準がたいそう歪んでますが」

「では、犯されたくありませんか？」

「まずそこから離れようぜ」

子猫の方も、大差は無かった。

それから幾つか見せられたが、もう疲れたので俺は試着室から離れたベンチに座っていた。

鏡が居てくれて助かった。こんな面倒で時間が掛かる作業、やはりやってられない。

そう思っていると、鏡の携帯から連絡が入って、

「試着室に来てー」

との事らしい。

何か問題があったのだろうか。それとも、もう終わったとか。

しかし、試着室の前に来たが誰も居ない。

「あれ・・・子猫、鏡・・・？」

俺がそう呟いた瞬間、試着室のカーテンが開かれた。

そこから、紫っぽい黒の落ち着いたレースの下着を身に着けている子猫が出てきた。

肌の滑らかさを強調し、なおかつそこには輝きよりも妖艶さが備わっている。

「じゃーん！」

子猫は元気にそう言った。

「・・・お前はどこの露出狂だ」

「やっぱり、似合ってるかどうかは男に訊かないと駄目でしょ？」

子猫の後ろに控えていた鏡はそう言って、一つ頷いた。

「いわゆる淑女の配慮ね」

「これじゃ痴女の暴走だよ」

どうやら今度は下着を選んでいたらしく、それで俺を呼んだのだそ
うだ。

下着を選び終えたところでとりあえず買い物を終え、俺たちは昼食
を取った。

もちろん、鏡も混ぜてだ。

「うん、これだけの物を買えばとりあえずは大丈夫でしょう」

昼食後、鏡は立ち上がったから満足そうに言った。

「私、午後は用事あるからもう行くね」

「鏡、今日は付き合ってくれてありがとな」

「だったらここの勘定持ってよ。最近金欠だからさー」

鏡は軽々とそう言って、俺は同意した。

それから鏡は手を振って背中を向けた。

「んじゃ」

「鏡さん、今日はありがとございました」

子猫も頭を下げる。

と、そこで何を思い出したのか、鏡が再び俺たちの方を向いた。人差し指を立てて、

「そつえば……一つ忘れてたよ。買い物」

「……？」

俺たちが疑問符を投げ掛ける。

「妊婦用の服を買ってないね」

「・・・買う必要があるのか？」

誤解って物のややこしさを今知った。

「うーん、ちょっと気が早いんですけど確かに必要になりますね。買
いに行きますか」

「お前も乗るな」

鏡が去って、俺は

「・・・もう十分だろう、帰るか」

そう呟いた。

子猫は、だが頷かない。

「鏡さんじゃないですけど・・・買い忘れた物があるんです」

「ん、そうか？じゃあ買いに行こう」

・・・そして十数分後。

「
で？」

俺は子猫に向かって問い掛けた。

子猫は水着を着ていた。

さわやかな印象を受ける水色のフリルの付いた水着。熱っぽい肌と相まって、少し眩しかった。

子猫は照れからか体をくねらせた。

「その・・・夏が来ますので」

「海に行く気満々だな」

「えへ・・・願わくば」

「残念だが、ウチは毎年夏になっても海には行かない」

「・・・！」

俺の海に行かない宣言に、ガクツ、と膝を折る子猫。

期待の大きさが凄まじかっただけに、絶望のリアクションも凄まじかった。

「な・・・何ということでしょう・・・」

「それに、お前みたいな奴がそんなの着てたってしようもないしな」

「む・・・むむ？・・・それはもしかして、私に対する挑戦ですか？」

俺の発言の子猫が闘志を再燃させ、立ち上がった。

ここはそういう状況だろ！！

とりあえず、胸を掴むようにしている右手を離そうとした。
このままだと、子猫に逆に襲われそうだし。

「いや、それ以上にこんな所を誰かに見られたら・・・」

と思ったその瞬間だった。

「お客様、どうなさいまし・・・キャーッ！！」

・・・従業員の悲鳴が聞こえた。

その後、何とか従業員への説明だけで済み、警察沙汰にはならなかった。

帰り道で、俺はたいそうな溜息を一つ零した。

「疲れた・・・何かこの疲れの原因の半分以上が不毛なものだった気がする」

「トオルさん、陰部に毛が生えてないですもんね」

「お前に後で国語辞典貸してやるよ。それと適当言っな」

そうあしらうと、続けてこう言ってくる。

「そういえば、水着は結局買っていただけでしたが、それって認めてくださったということなんでしょうか？」

「勘違いするんじゃない、トラブルがあったから買い取っただけだ」

「え……でも揉みましたよね？」

「触っちゃっただけで、別に揉んでない」

「それじゃあ、ちゃんと揉んでください。どうぞ」

「惜しげも無く差し出すなって」

そもそも肉体的な意味で言ったんじゃないかねんだがな。

家に入るとすでに母さんが帰っていた。

「あらトオル。子猫ちゃん。買い物はどうだったの？」

「とっても楽しかったです！」

「俺はマジで疲れたがな……」

喜びを全身で表現している子猫に対して、俺は全身で気だるさを表

現して返事した。
袋を置くと、母さんが中を覗き込む。

「あらあら、たくさん買ったのねえ・・・あら？」

中から何かを取り出す。

俺も何かと思つて見ると、それはゴム製の避妊具。いわゆるコンドームだった。

「・・・・・・・・トオル？」

鋭い視線が俺に向けられる。

俺は目を見開いたまま、ただ驚愕していた。

「あれ・・・え？いや、俺はそんなもの知らな

」

「ちゃんと考えてるのねえ。お母さん見直しちゃったわ」

「・・・・・・・・あの・・・褒めないでくれる？」

母さん・・・・・・・・

涙が出そうになった。

とつか何でこんなものがあるのかというのが問題だ。

「子猫、何て物を買ってるんだ」

そこで子猫を問い詰める。
子猫はあっさりと

「避妊具です。トオルさんもこれで安心ですね」

「俺は何に対して不安だったんだろっね・・・それで、どうして買った？」

「えっと・・・鏡さんが、『お腹の子供に影響が出ないように』って」

「元凶は鏡か!!あいつのせいで変な誤解された・・・ああくそ、何か腹立つ!!」

こんな置き土産をくれやがった鏡は、もう執行猶予無しで死刑にするべきだと思った。

というか、使用目的がそれって・・・。

「もう、トオルさん。勃たせるのは腹じゃなくてオンオンですよー?」

「黙れエロ猫」

<新コーナー>今日のボツネタ

「あの・・・トオルさん。何ですか、この新コーナーとやら」

「製作途中に生まれてしまった不出来なネタを、せつかくなので公開しようというコーナーだ。ちなみに、今後暇な時にはやるつもりらしい」

「え？では、私たちのアン！な艶事も公開されるんですね・・・楽しみです！」

「どうしてすでに軽く喘いでいるのかなあ・・・？それ以前にそういうのは一つも無いっての」

「でもそうでもしないとネタには・・・」

「それはポツネタではなくズ　ネタだろう・・・」

「え？壺？女性の秘密の壺をどうするつもりですか！？」

「違う、逆転させる」

「・・・□？フ　ラですか？」

「上下にじゃない文字をだ！ツボじゃなくポツだ！何だそのコペルニクスも真っ青な発想の転回は！」

「それは又イたからでしょう（笑）」

「真っ青から無理矢理持ってくるな・・・もういい、これでは埒が明かない。じゃ、もういくぞ」

「待ってください・・・イクなら中で！」

「お、おい何脱いでんだよっ、止め・・・アッー！」

・・・前置きは終わりです。次からいきなりネタに入ります。

鏡は軽々とそう言って、俺は同意した。
それから鏡は手を振って背中を向けた。

「オツパイならー」

「おーい、酷く卑猥なあいさつのくせに無邪気さを装うなよー」

「はい、またアワビーましよー！」

「お前は装う気すら無いのかー」

それにアワビーってどづいっ動詞だ。

第六話 むにゅ（後書き）

新コーナー・・・前置きのせいで見にくくてすみません。

第七話 生徒会長断言！

この前の一件以来、俺は生徒会長秋元千鶴に目を付けられてしまったようだ。

何かと声を掛けられることが多くなった。

今日も、廊下で友人と話している所を捕まった。

「ん、そこに居るのは木下じゃないか」

「千鶴先輩、何か用ですか？」

「いやな、お前がこの前のようにいかがわしい行為をしていないかどうかを確かめているだけだが・・・」

「この前もしてませんがね。ていうか、子猫が居ないでしょう？」

「え・・・」

と動きが止まる。

秋元が驚いている、何故だ？
やがて秋元は恐る恐る訊ねた。

「今度は・・・この男が相手なんだな？」

「いや、取っ替え引っ替えにもきつと壁はある！」

元々取っ替え引っ替えも何もしてないけども！

秋元は子猫と弁当を食べているときも話し掛けて・・・

「むむ・・・」

・・・来ない。

「あの・・・先輩、話し掛けましょう。教室内に居るくせにじっと見てないでください」

「むう、そうだな」

と仕切り直しか一度背筋を伸ばすと、

「木下。弁当は美味いか？」

「え？ええ、まあ」

「それは良かった」

深く頷く。

「あんた作ってないだろ。何で満足そうなんだ」

「それよりも、昼食を一緒しても良いだろうか」

「まず俺の質問に答えろ」

軽く無視された。

そしてそのまま、そこかしこから席を持ってきて隣に並べる。

「まあ、別に良いですけど……」

どうせ、俺の監視なのだろう。まったく……。だが、子猫が立ち塞がって抵抗した。

「トオルさんと私の時間を邪魔しないでください。上級生でも容赦しませんよ」

噛み付くような臨戦態勢の子猫に、これまた高圧的に秋元は言う。

「私はこいつの監視に来ているんだ。お前こそ、木下と不純異性交遊などしてみる。校則の下で裁いてやる」

「むう……じゃあ一応訊きますけど、不純異性交遊にバナナは入ります？」

「入る」

「コラ待て」

生徒会長だからって勝手に校則を作るな。

それと、子猫もバナナとの関係性を述べてくれ。

「では、こういうのはどうです？」

言ったのは前の席の鏡だ。

俺たちは一斉に鏡を見た。

その手には、今話題のバナナが握られている。

「見ていてくださいねー」

そしてバナナの皮を剥く。

中の薄黄色の果肉が姿を現した。

「うーん、おいしそー」

鏡は口を開けた。そのまま食べ進めるのかと思いきや、しかし啜えただけだった。

俺は、嫌な予感でいっぱいになりながら、黙っていた。

鏡は垂れてきた前髪を指でそつと耳に掛けた。

「んおっ……んっ、はぁ……」

齧らずに、バナナの果肉を加えたまま果肉を上下に揺する。

鏡の口の中にバナナが入っては抜き出てくる。

「ん……ふごひっ、おおひい……うむう……」

時折苦しそうな声を出す鏡は、

「ふうっ・・・うあうっ、ぱあ」

とバナナを口から出した。

しかしそれでは終わらずに、バナナの下の方から時間を掛けて舐め上げる。

先端に辿り着くと、今度は丹念に丁寧に舐め始めた。

そして、バナナの先端から舌をじわりと離す。

唾液が糸を引いてやがて床に落ちた。

鏡は満足そうに俺たちに微笑むと、

「ふう・・・ん、美味しかった」

と感想を述べた。

だが、バナナは艶やかさを増しただけで果肉自体は減ってない。

「で、どうです？私はただバナナを食べただけなんですけどー、これはアウトになるんでしょうか？」

その問いに、秋元は顔を僅かに赤らめて呻くように言った。

「これは・・・バナナを食べることは異性交遊ではない・・・よ、よって、悔しいがセーフだ」

「やた！」

「会長、これは認めちゃダメだよー」

俺は部活には入ってないので、放課後はいつも家に直帰する。だがたまに、玄関を出た所で呼び止められる。

「おーい、木下ー」

天から聞こえる声。俺は上を見上げた。するとそこには俺を見下ろす秋元千鶴会長が。そう、生徒会室は生徒玄関の上にあるのだ。

「・・・何です？もう帰りたいんですけど」

「ちよつと来てくれ、大事な用だ」

「ええー・・・」

「来ないと校内放送によつて、お前が足の匂いが好きな変態だといふことが残っている生徒たちに露呈することになるぞー」

「あんた何をいきなり・・・」

『えー、生徒会長からの連絡です。一年五組の木下トオルくんですが、実は足の匂いが』

「あつ！？ちよ、勝手に趣味を決め付けた挙句に放送するなああああああああつ！！」

怒りの形相で俺はまた校内に戻った。

生徒会室のドアを開けると、そこには数名の生徒会役員と奥に秋元が居た。

秋元は面白そうに笑っている。

「お、早いな木下。今回の当たってたのか？」

「当たってるわけないでしょう。いい加減、俺は怒ってるんですよ」

「ん、そうか。では来週はお前の過去の女性経歴を」

「カテゴリーを変えろと言ってるんじゃない」

それとあんたが知ってるわけないだろう。

「で、呼んだのは他でもない」

と急に話を切り出そうとしたところを、俺は制した。

「嫌です」

「まだ何も言っていないぞ」

「言わなくても大体分かります。少なくとも俺にとってマイナスになることです。だから嫌です」

「では良いんだな？」

「お願い会長、俺と会話をしようぜ」

何故ここまで会話が成り立たない……。

遂に、秋元は今日の用件を口にした。

「今度の生徒会新聞にお前の記事を載せようと思っているのだが、
どうだろうか？」

「却下」

『どうだ』の辺りから言っただけだ。

秋元は深く頷く。

「うむ、やはりお前なら賛同してくれると思っていたぞ」

「この人本当に話を聞かないな」

まわりの生徒会役員がくすつと笑う。
これはどうやら日常茶飯事のようにだ。

「『木下トオルと猫神子猫の隠されていた秘密の関係……』という
見出しで、すでに書き始めている」

「新聞に取り沙汰さないでもらえます?」

「やはり見出しが気に入らないか?だが、内容は充実しているぞ。クラスメイトへのインタビューや、アンケートも取っている。もしかして、情事に勤しむ写真が無いのが問題か?」

「それ以前にプライバシーの問題です」

「え?もしかしてハ撮り写真があるのか?」

「そんなの載せたらあんた即刻不信任だ」

いい加減話を聞いて欲しかったが、出てもいない話題に食い付くハングリー精神だけはある意味尊敬できた。

そして俺は、秋元にひとしきり弄ばれて、ようやく帰路に着いた。

「千鶴先輩にはホントに困らせられる・・・」

そうやって俺の部屋でぐったりしていると、

『トオルさん!今私が疲れを抜き取ってあげますからね!まずは手ヤックを下して・・・』

なんていう風にすぐに子猫が襲い掛かってくるだろうから、俺は重い体を起こした。

「・・・風呂入る」

と立ち上がるうとして、俺の股間をまさぐる子猫を見た。
俺の頭の中の予想よりも早い動きだ。

「ん・・・チャック固い・・・」

「・・・・・・・・・・・おい、何時から居た？」

俺が静かに問うと、

「この部屋に入ってきてからです。私ずっとここに居たので」

あっさりと答える。

そしてまたチャックと格闘を始める。

「あ、開いた」

手を差し入れようとして、しかし俺が体を引いたので子猫は物欲しげに

「ああ・・・・・・・・」

と手を伸ばす。

俺はチャックを閉じて、子猫に言う。

「お前な・・・人の部屋に勝手に入ってくるな。ていうか最初から入ってるんじゃないか」

「まあまあ、そう言わずに。子供の一人や二人」

「・・・俺ら何の話してたっけ？」

「またも子猫を無効化して、俺は風呂へと疲れを癒しに向かった。」

「だるい・・・寝ても覚めてもこれじゃ、いつか死ぬな」

力無く俺はそう言って、湯に顔を浸す。

でも、子猫を無力化している今なら、俺は安らげる。

子猫も、本当に俺のことを考えているんだったら、黙ってれば良いのに・・・

「どーん!!」

「・・・ああ頭が痛い。」

「どうやら子猫の束縛が解けたらしい。六甲縛りだったにも関わらずだ。(最近、縄の扱いが上手くなっていて自分が嫌になる時がある)俺は動かずにもう諦めた表情で、子猫が入ってくるのを止めなかった。」

「止めてもどうせ入ってくるし。」

「さあ、トオルさんの疲れを癒しますよ!」

「と俺を椅子へと促すので、俺は浴槽に入ったまま目を瞑った。くそ、面倒だ・・・本当に、毎日毎日面倒なことばかりだ・・・」

「あれ、トオルさん・・・?」

子猫が問い掛けるが、俺は眠っているように声を返さない。
いや、実際に眠っていた。

今日の疲れがタイミングを鑑みず一気に襲ってきて、俺は抵抗する
間も無くまどろみに身を任せていた。

目の前に、あの子猫が居るといふのに

「……………ん」

どうやら寝てしまったようだ。どれくらい経ったかは分からな
いが、お湯の温度も体温も下がってないところを見ると、それほど
でもないようだ。

……………ん？そういえば、子猫が居ない。横目で見ても、もちろん目
の前にも居ない。

この状態の俺を放っておくなんてあいつらしくないな。まあ幸運だ
が。

今は少し力が入りにくい、疲れは意外と取れているようだ。

「……………って危ねえ……………何もされてないみたいだし今は子猫も居
ないから、さっさと体洗って出るか」

浴槽の底に手を着いて立ち上がるうとした時、それが底ではないこ
とに気が付いた。

ふにゃ、っとした感触だったからだ。

擦ってみると、それは滑らかな触り心地の良い肌で。

「……………足？」

その瞬間、俺は全てを悟った。

ああはいはい……………なるほどね。今、俺の……………俺の後ろには

「あ、やっと起きましたね。トオルさん」

「……………お前居たのかよ」

後ろから俺を抱きしめるように、子猫が居た。

……………ん？え、じゃあこの背中に当たる二つの柔らかな感触は……………

「うおわっ！！！」

と俺は浴槽の逆側まで素早く移動した。

今まで子猫の胸が背中に当たっていたというのか。

俺は当然づるたえながら言っ。

「な、なな何で……………」

「トオルさん疲れている様子だったので、そっとおきました。という事で、早くしちやいませしょうか」

子猫は立ち上がり、浴槽から出た。
まず隠せ。と言いたかったが、タオルも無いので隠す気も無さそう
なので止めた。

「何をだよ……」

「決まっています。ここはお風呂場なんですよ？することと言ったら
一つです」

自信満々に、そして高らかに言う。

「ソー プ イです！」

わお、湯気で曇って字が読めない！（現実逃避）

「ふん、自分一人でやってる。俺はもう上がる」

風呂場を出ようとした俺を子猫が出口を塞いで止める。

「ここを通りたいのならこの私を……犯して行くことですね！」

「あのね、それ巷でよく使われる台詞だからさあ、汚さないであげ
てくれないかな」

こんな使用方法、酷いと思う。

俺は再び浴槽に体を沈めた。

何か・・・ここから抜け出す手は無いか？

猫の弱点・・・ん？

と俺は気が付く。

そうだ、ここにたくさんあるじゃないか。

それは水。猫は水浴びが苦手だ。

「はっ、弱点を見つけたぞ・・・！」

俺はそう言うと、水を両手で掬い上げ勢いよく子猫に向かって掛けた。

「どうだ！」

「キヤツ・・・！」

と短い悲鳴と共に、子猫は床に座り込んだ。

「おお・・・本当に効いた」

俺が安堵して立ち上がると、子猫は複雑そうな顔で

「うつ・・・嫌・・・んっ・・・」

そして唸る。少し弱弱しく。

俺は怪訝な顔で止まる。

「え、子猫？・・・大丈夫か？まさかそこまで効くとは思ってなくて・・・」

そう言っただけで俺が覗き込むと、子猫は俺を見上げた。顔が少し赤い。子猫は口をきゅっと閉じると、恥かしがりながら俺に向かって怒るように言った。

「・・・と、タオルさんのせいでアソコ濡れちゃったじゃないですか！こんなに感じさせた責任取って下さいね！！」

「・・・そうですか。」

「お前もう風呂出ろっ！・・・うわッ！止める寄ってくるな！い、息が荒い！！」

後で聞いたが、どうやら子猫は男性に掛けられると感じて濡れてしまう体質らしい。

しかしよくよく考えてみると、子猫が浴槽に入れる時点で水自体は弱点ではない。

という事に気が付いたのは、しばらく後のことだ。

第八話 その女、危険につき。

そう言えば、葛西由紀に関してこんなことがあった。

昼休み。俺は、何か飲み物でも買おうと思って自動販売機の前に来た。

「あ、由紀先輩じゃないですか。こんな所で何を？」

そこには風紀委員、葛西由紀が居た。今日も真っ白なポニーテールが優雅に揺れている。

俺は警戒しながらも、一応この前の事もあったので声を掛けた。が、これが間違이었다。本来ならば、近付かずに去るのがベストだったようだ。

「あら？木下くんじゃない」

葛西は俺の声に反応してこちらを振り向いた。優しい目が俺を捉えた。

「何か用？」

「いえ、特に用はありませんが・・・」

「なるほど・・・ナンパ？だったら脅すわよ」

「アンタに出来る奴が居たら、是非俺に紹介してください」

葛西由紀。 正真正銘、こいつがこの学校の頭領だ。

葛西の軽口を軽く流すと、彼女は俺に場所を譲った。

「買うんでしょう？お先にどうぞ」

「ああ、いえ・・・由紀先輩が先に居たじゃないですか」

「私、まだ何を買おうか決めてなくて・・・」

「そうでしたか。では失礼して」

俺は財布から小銭を取り出して自販機に入れる。

そしてボタンを押してお茶を買う。

しゃがんで取り出して、葛西に向かって微笑んだ。

「ありがとうございます、先に買わせていただいて」

「そうね。私がおうとしていたところだったけれど、私は木下くん先に買わせてあげましたね」

「・・・？」

「貸しが一つ出来た、ということよ」

「ちよっ・・・」

葛西はひたすら黒かった。

「あの・・・そのために？」

「もちろん」

清々しいほどの肯定だった。
俺は唸る。

「嘘か・・・騙された」

これで俺は葛西にどんどん脅されていくのだろうか・・・
俺はそう思って頭を垂れた。

「でも、何を買おうか迷っていたのは本当よ」

「そう・・・なんですか？」

「あつ、そうだね。木下さんのオススメとか買おうかしら。何が美味しい？」

そう言われたので、

「うーん、じゃあ・・・カルピスソーダとかどうです？」

と答えると、葛西はしばしそれを凝視してから言っ。

「カルピス・・・白濁・・・・・・・・・・セクハラね。風紀委員として罰を与えようかしら」

「その勘違い、すっごい不本意です」

白いっただけで反応するな。

ガシャン、とカルピスソーダが落ちてくる。

結局葛西は俺のオススメを買った。

カルピスソーダを取り出し、開けようとする。

だが、なかなか開かない。

というのも、それは缶のカルピスソーダで、つまり葛西はプルタブを上げられないみたいだ。

「開かないわ・・・・・・・・んっ・・・・・・・・」

そこで俺が飲んでいた茶の蓋を閉めて、

「俺が開けますよ。貸してください」

と缶を渡してもらおう。

ぐぐっ・・・と力を込めても、しかし容易には上がらない。

そこでより力を込めて、

「くっ・・・！」

パキッと良い音が鳴り、プルタブは遂に開いた。

「開きましたよ、これで飲めま

」

すると目の前には、胸の辺りに白濁液もといカルピスソーダをかけられている葛西が居た。

「……………」

黙って手元を見ると、力を込めすぎたのか缶が葛西の方に傾いている。

……やっちゃまった。缶と格闘しすぎていつの間にか振ってたんだ。

「す、すいませんっ！」

俺がそう言つと、葛西は鋭い視線で俺を見据えて

「……………まさか、達したの？」

「この状況でそれは無い！」

訂正、鋭い視線で俺の股間を見据えていた。

「ああでも、これはちょっと恥かしいわね……………」

葛西は少しうろたえたように、服に付いたカルピスに触れた。ブラウスが透けて、確かにまずい感じた。

「どこかで着替えないと・・・ここからだったら更衣室よりも保健室の方が近いですね」

俺はそう言って、葛西に上着を被せた。

葛西は少し驚いた顔で俺を見る。

「それで隠してください。行きますよ」

「あ、そうね」

と、そこで顔を少し赤らめた。

「・・・どうしたんですか？」

「これ・・・」

『これ』とは、今俺がかけた上着のことだ。

葛西は一度口を固く閉ざし、そしてゆっくり開いて言った。

「すごい注目浴びちゃうわ・・・」

「あ・・・」

すれ違う生徒が葛西を見ている。女子生徒が男子の上着を着ていては逆効果か。

「それに、校則違反だし」

「こんな時にまでそんなこと言わないでくださいよ」

「まあ、そつね」

と応じた葛西は、今度はちょっと照れくさそうに微笑んだ。

「・・・中々良いわね、こんな羞恥プレイも」

「上着返してください」

そのはにかみは認めない。

保健室に入ると、すぐに葛西はカーテンで仕切られたベッドへと向かった。

「ちょっと、着替えさせてもらっても良いですか？」

「ん、良いが・・・どうしたんだ？」

居たのは所謂保健室の先生、塩谷可南子。しおや かなこ

ショートカットの黒髪で、らしくも白衣を纏っている。少し男っぽい話し方をするので、先生の中でも印象が強い。

塩谷の問いに、葛西はあっさりと同じく答える。

「木下くんに白いのをかけられて、制服が汚れちゃったんです」

「なっ・・・」

絶句。というような感じで俺を見た。

「いや、誤解しないでくださいよ？これは」

「お前、制服を汚さないように中で出すのがセオリーだろ？そんな不安ならゴム使え」

「校内でのそのような行為に普通も何もありません。それにセオリーって使うと何でも綺麗に聞こえると思うなよ？」

塩谷可南子。人呼んで、（こっちが）まいっちんぐカナコ先生。

制服を着替えた葛西と俺は、保健室を出た。

「由紀先輩、すみません。こんなことになっちゃって・・・」

頭を下げると、葛西は優しげに、

「私は別に気にしてないわよ」

「でも・・・」

「これであなたを恐喝するためのカードが揃ったんだもの」

そう言って、今日一番の笑みを俺に向けてくる。

眩しいを通り越して、むしろ俯きたくなるほど暗かった。

うわぁ・・・

「それで、第一の脅迫を行わせてもらおうわ」

「え、今ですか？」

俺が身構える。

しかし、その恐喝は俺の予想をある意味で凌駕しているものだった。

「木下くん・・・あなた風紀委員に入ってくれない？」

「あなた風紀委員に入ってくれない？」

その言葉は、俺の脳内を一瞬で駆け抜けた。

「・・・ほえ？」

情けない声が出た。

だけど、何でそんな・・・もっとうとう、犬みたいに扱われるのかと思っていたのだが。

「私の仕事を手伝って欲しいのよ」

葛西は俺の混乱などお構い無しに話を進めていく。

「実は、風紀委員が少なくて困っているの。男子は一人も居ないし」

「お、俺は無理ですって。何かそういう仕事めいたの嫌いで」

「え……でもハーレム、よ？」

首を傾げて、不思議そうに訊いてくる。

「風紀委員がそんな勧誘してたら学校腐りますよ」

そんな理由で入るわけ無いだろうが。

それ以前に、流石に俺には務まらない。風紀なんていう物のために働く事に意気が見出せないだろうからな。そして俺がもう一度断ろうとした時だった。

「トオルさん！」

子猫の俺を呼ぶ声が、聞こえてきた。

「あら、子猫ちゃん。……どうしたの？」

確かに、どうしたの？と訊かれるほどに、子猫は息を荒立てていた。俺のことを探し回っていたのだろうか。

子猫は葛西の質問は無視して俺に問うた。

「その人と何してるんですか？トオルさん」

「いや、俺はただ

」

「うふふ、掛け合いつこよ」

「どうした風紀委員？」

廊下で何を掛け合つのだ。

「掛け合いつこ！？何ですそれ？私もしたいんですけど・・・」

「お前も興味を示すな」

目を耀かせる子猫を、俺は止めた。

「由紀先輩、冗談は止めてくださいよ。普通に話してただけじゃないですか」

「ええそうね。だから『言葉の』掛け合いつこしてたって言ったじゃない」

「・・・この世には『会話』という単語があります。今後はそれを使って下さいね」

本当に面倒な人だ・・・。

それで、と葛西は先ほどの話に戻った。

「もう一度訊くけど、風紀委員に入ってくれない？」

「嫌ですよ。迷惑も掛かってしまいました」

俺の言葉に子猫が呼応する。

「そうですね。それに風紀委員なんかになったら、私との愛を育む時間が減っちゃいます」

「あ、こいつは無視しましょう」

そして葛西と俺は会話を続ける。

「・・・そこまで嫌だって言うんだったら仕方が無いわ。後はあなたを脅迫するだけよ」

「さっきのネタですか？でも、あれはただの事故で

「私の服を白濁液で汚し、さらに着替えさせるためにと保健室に連れ込んで無理矢理処女を・・・うっっ」

葛西は哀しげに目を伏せた。

「あれ・・・どっから出てきたんです、その話？」

「まあ、この話を流せばこの学校に居られなくなるわねえ」

「そんな嘘誰も信じませんよ、きつと」

「でも、私とあなた。生徒はどちらを信じるかしら」

葛西はそう言って、黒い笑みを零した。

風紀委員と一般生徒。影響力の差は歴然だろう。
く……と俺が抵抗を諦めようかとしたところだった。
不意に子猫が俺と葛西の間に入ってきた。

「トオルさんがそんなことをしない証拠があればいいんですよ？」

葛西は眉を寄せ、子猫に小さく頷いた。

「……ええ」

「私はトオルさんと一緒に住んでいます……実は私……」

「

空気が重く沈黙した。

その静寂を打ち破り、子猫はスカートをめくりながら毅然とした態度で言い切った。

「まだ処女です！」

「何の証拠だ何の……！」

廊下の真ん中でスカートをたくし上げながら何を声高に言う！

「それは……くっ、やられたわ……！」

「って効くのッ!？」

何でそんなに悔しそうなの!？」

「仕方ないわね。とっておきのネタを出すしかないわ」

決まり悪げにそう言って、葛西は写真を取り出した。

それは、デパートの試着室に向かって俺が子猫を押し倒している写真。

実際は靴に引っ掛かって倒れこんでしまった、というただの事故なんだが。

だがどの経緯で手に入れたのかは知らないが、これで状況は一変した。

本当にこればかりはどうしようもない・・・もう、風紀委員に入るしか

「風紀委員に入らないと、これを近くの小学校にはら撒くわよ」

「いや、せめてこの高校にしとけ」

小学校は無駄に危ない。

「じゃあ、隣の家のポストに投函しておこうかしら」

「もうちよつと健全な近所付き合いを考えましようか。あとそれ別に困らない」

このタイミングで何故きちんと脅迫しない・・・！

葛西はいらだった調子で

「じゃあどこにばら撒けば木下くんは満足出来るの？」

そう問い掛けるが、

「俺はそんな類の変態じゃねえんです」

俺はそう答えて交渉は一向に進まない。

そこで、葛西は子猫の方を見て同じ質問をした。

「私はネットを希望します」

「一番性質悪いって」

「えへ」

嬉しげに肩を竦める子猫。

「これで私たちは名実共にカップルになれますよ！」

「俺、お前と知り合いだと思われただけで嫌なんだが」

妄想の世界に入り込んだ子猫に溜息を吐いて、いい加減に話を進ませようと俺は葛西を見た。
すると葛西は困った様子で

「困ったわね・・・脅迫材料が完全に無視されてるわ」

「あ、すみません」

「・・・で。実際の所、それで脅迫出来るかしら？」

「うーん、俺は可能かと。でも子猫はむしろ喜びますね。いや、悦びますね」

真面目に俺が答える。

すると葛西は、こう言った。

「それじゃあ駄目だわ。悦ばれるなんて、私の趣味じゃないもの」とあっさりと身を引いた。

「誤算だったわ。まさか子猫ちゃんがここまで出来るとは・・・」
しかし悔しげにそう呻く。

「・・・いや、アレただのエロ猫神ですけど。
纏まりそうな空気に、俺はその言葉を飲み込んだ。

「えっと・・・じゃあ、もう戻っても良いですか？」

「ええ良いわ。また今度ね、たぶん一カ月後くらいに」

「脅迫予告止めてもらえます？マジで怖いです」

「ふふふ・・・」

そして、葛西は親しげな、それでいて不気味な笑みを浮かべて俺たちの前から消えていった。

子猫は、ようやく葛西が居なくなった事に気が付いたのか、教室に戻り始めている俺の背中に声を掛けた。

「あの、トオルさん。本当のところ、今日は何をしてたんですか？私探していたんですよ」

そう訊ねたので、俺は何があつたのか語った。話が終わると、子猫は静かに頷いた。

「そうでしたか。何か事件に巻き込まれたのかと思って心配しちゃいました」

「事件なんて起こんねえだろ普通」

「まあ、確かにそうですね」

子猫は笑ってもう一度頷いて、しかし急に俺に向かってむっとした表情になり続ける。

「何か葛西さんだけじゃないので、今日掛け合いっこしましょうね」

「ん、良いぜ。ていうかすでに今してるだろ。言葉の掛け合いっこ」

「いいえ」

素早く否定して、そこで俺の耳に口を寄せる。

「掛け合つのは　　ですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言った言葉を、ここに書くことは出来ない。

ただ、風呂に入る時に俺は子猫を前よりも嚴重に縛り上げたのは事実だ。

<今日のボツネタ>

「うーん、じゃあ・・・カルピスソーダとかどうです?」

俺の返事に葛西は首を傾げた。

「カルピスソーダ?カルピスソーダの良い所って何?」

『そうですね。女性が白濁液を飲んでいるのを合法的に眺めることが出来る所・・・ですかね。ハハハッ』

「って、それは木下くんにとって良い所でしょう!」

「今の妄想は著しい名誉毀損です」

どんなキャラだ。

第九話 ウィィィィン

夏がすぐそこまで近付いていた。

いや、もう夏と言っても良いのかもしれない。俺自身も夏の定義をよく知らないし。

まあ今日の暑さは誰が何と言おうと夏そのものだった。

そんな、ある暑い暑い日の話だ。

「あう~~~~~」

地球温暖化が人間に与える影響と猫に与える影響がほぼ同じくらいかどうか断定出来ないが、少なくとも子猫はだらしなく居間の床に寝転がっていた。

髪も無造作に広がって、そして脱力した様子はまさに夏バテ。

「大丈夫か？」

「うう駄目です……あ、今なら襲えますよ？」

「それだけ言えりゃ大丈夫だな」

けどまだ元気。

「ほらよ。飲め」

そう言つて俺は子猫にカルピスを差し出した。
子猫は冷えたカルピスを見て、跳ね起きた。

「わあっ！トオルさんありがとうございます！」

同一人物か分からないほどの変化を俺に見せつけ、カルピスを啣る。

「ん~~~~！！最高ですっ！！！」

飲み干して、元気な声で言った。
それから不意に窓の外を見る。

「ふう、暑い日に冷たい白濁液を一気に啣る……女の浪漫ですねえ……………」

「遠い目して何言つてんだこいつ」

どつやら熱で頭がおかしくなったようだ。

「つえへへ……………」

終いには笑みすら浮かべていた。

「うーあ…………あ、そういえばこの家にはクーラー無いんですか？」

子猫が暑さに耐え切れずしてか、俺に問うて来た。

「ん、ある」

俺はあっさりと答える。

「じゃあ使いましょうよー、というかわせてくださいよー」
体を揺すって俺に懇願する。
面倒なので

「ああもう仕方ねえな、リモコン向こうにあるはずだから持って来い」

そう俺が許可すると、子猫はすぐさま走り出してリモコンを持って来た。

「あの・・・」

しかし躊躇いがちに俺に訊く。

「バブのリモコンもあつたんですけど、もしかしてこれも使います?」

「そいつぁ捨てるッ!」

持ち主不明のバブが、家ではたまたまに発見される。

ピツ、とクーラーを操作して室温を下げた。

すると、先ほどまでうな垂れがちだった子猫もやがて元気を取り戻し、

「じろにゃーん」

と俺に膝枕させて寝ていた。

「暑苦しいから離れろって。これじゃ何のためにクーラー点けたか分かったモンじゃねえ」

「いえいえ、こうやって涼しくした上で温もりを求めるのが良いんじゃないですか」

「そんなの初めて聞いたぞ」

「それはいけませんねー、時代遅れですよ？」

「だったら俺は遅れていたいな」

「え？あ、や……いえ、その……トオルさんの貞操観念の強固さは分かりましたから、クーラーの話をしましょう？」

「俺が話振ったみたいにしないでよ」

もうヤダこいつ。

「すいませーん」

と鏡の声が玄関の方から聞こえてくる。

ドアを開けると、鏡が健康的なTシャツ短パンで、しかも麦わら帽子を被って立っていた。

「鏡？」

「やあ」

と、鏡は軽快なあいさつを俺にする。

手元を見ると、そこには大きなスイカが網に入れられて吊り下がっている。

鏡はそれを俺に向かって掲げた。
そして笑顔で言う。

「はいコレ。中に入れて？」

「……………えつと……………」

玄関先で俺は少し迷っていた。

何故なら鏡が居たから。それだけでもうすでに理由としては十分だ。
……………のだが、今回は彼女の発言も、俺を迷わせていた。

とりあえず当たり障りの無さそうな返答をする。

「俺は・・・そういうことは体に良くないと思うぞ」

「・・・はい？」

「いや、だからスイカを中に入れろってお前が・・・」

「・・・」

あ、そういうこと？と鏡は今ごろ納得。

え・・・今ごろ？

ということとは、どうやら今日の彼女はどこかまともらしい。
変に身構えたせいで拍子抜けだった。

「あはは、そうじゃなくてね、スイカあげるから家の中に入れて、
って意味で言ったの。それにそんなの入らないよ、私には。試した
ことはあるけどねー」

「うわっ、一瞬でもまともだと思った俺が馬鹿だった」

試した時点で駄目。

「あ、子猫ちゃん。こんちわー」

「鏡さんでしたか。こんにちは、今日はどうしたんですか？」

居間に鏡を案内すると、二人は挨拶を交わした。

「実は家のクーラー壊れちゃってさ」

「それで涼みに来たってことか」

俺が推察を入れると、鏡は頭を掻いて頷いた。

「まあね。で、せっかくだから一緒にビデオ鑑賞しようと思って」

と鏡は鞆の中からビデオテープを取り出した。

「これとっておきなんだー。絶対気に入ると思うよ？」

「ん？何のビデオ持ってきた？」

そう言っただけで俺が鏡からビデオを取り上げる。

パッケージには物凄い爆発や戦車の写真が載っていた。
タイトルは『忘れ去られた戦場から』。

「へえ、戦争モノか・・・どんな話だ？」

「・・・うーん・・・強いて言うなら、熱くて激しい、かなー」

「ふーん・・・鏡がこういう映画を見るってのは少し意外だな」

ビデオデッキまで近付いて、俺はパッケージを開ける。

そこで俺の手が止まる。

・・・あれ？

中のビデオを再度よく確認してから、俺は鏡に訊ねた。

「鏡……これ何だ？」

「え？『背徳教師 薫』ってAVだけど？」

あつさりと答えられた。

俺は目を細めた。

「……戦争モノじゃなかったのかよ」

「でも熱くて激しいよ？」

「だから何なんだい？」

忘れ去られた戦場から届けられたのは、一本のAVだった。

パッケージにビデオを戻して、俺は鏡に言う。

「それ以前に、友人宅でこんな物を見ようとしなくて欲しいんだが」

「ええ……あ、でも子猫ちゃんは見たそうだよ？」

見ると子猫は早くもテレビの前で陣取っている。

「あと、実はそのビデオ、複数人プレイだったりするんだよね。だから、トオルくんも含めて皆で見ながらシタリして、けっこう楽しめると思うなー」

「……………は？」

発言の意図が分からなくて、俺は首を傾げた。

すると鏡は、鞆から棒状のテラテラした何か（それが何か俺には分かってはいたが、認めたくはなかったためにこのような表現になっている）を取り出してスイッチを入れた。

ウイイイイン、ウイイイイン。

「だからね、映像を参考にコレとか使つて」

「帰れッ！！！！」

鏡、退場。

鏡を追い出すと、再び緩やかな時間が流れ始めた。
俺は欠伸をして、しばし目を瞬いた。

……少し眠くなってきたな。

とそう思った所で、子猫が口を開いた。

「トオルさん、ちょっと良いですか？」

「……………ん？また何かあるのか？」

「何かある……………ええまあ、ちょっとお願いがあるんですけど……………」

子猫の方を見ると、いつの間にか俺のすぐ傍にまで来ていた。しかも、良く見ると猫耳と尻尾が生えており、瞳孔も縦に長くなっている。

「は？ね、子猫？・・・お前それ一体

」

言葉の途中で子猫が無言で俺を押し倒す。

続けて子猫の体重が全身に掛かり、俺は体を怯ませた。

「・・・先ほどあのビデオを見れなかったので、私はその分の代替品を求めます」

そして起き上がろうとする俺を、圧倒的な力で押さえ込んだ。

およそ抜け出すことは出来ない。見つとも無く本気で足掻いても無理だろう。

「この状態になったら、もう私を退けることは出来ませんよ？これ『猫神モード』って言って、これが本来の私の姿で、身体能力だけじゃなく神固有の特殊能力も使用出来るようになるんです。えへへ、これで

」

だが、そこで俺は無造作に子猫の耳を掴んだ。

・・・嗚呼、柔らかい・・・

俺はさらに力を込める。

「ひゃっ!?!」

子猫の短な悲鳴が聞こえる。

興奮した声から、不安げな声色に変化した。

は、あ……もう、駄目だ……我慢できな

「え……？トオル……さん？」

「はあ、はあ、はあ……み……み……」

「あの一……？」

「……こ……み、も……せろ」

「な、何でしょうか……？」

そして、俺は遂に理性を失ってしまった。

「猫耳……はあ、もっと……もっと触らせる……っ！！」

俺はにわかに体を起こし、そのまま子猫を逆に押し倒した。

ドンツ、といささか乱暴な音がして、子猫は地面に仰向けで転がる。

「いた……この状態でどうして……ってトオルさん？な、何を……？」

「はあ……はあ……猫耳柔らかい、気持ち良い、食べちゃいた
いいいいっ！！」

子猫の表情が、さつと青ざめた。

すぐさま俺の押さえ込みをすり抜け居間の外へと逃れる。

「こ、これは……予想を良い意味で裏切られすぎて、流石の私でも受け止められませんー！！」

「猫耳と尻尾、待てやゴラアアアアアアアッ!!!」

正気を失った俺は、逃げる子猫を鬼の形相で追いかけ始めた。
忘れられているかもしれないが、俺は猫好きだ。

それも、実はかなり狂氣的なまでに。

子猫を捕まえたのは玄関であった。

もう少しで逃げられる所だった。危ない。

いや、危ないのは俺だが。

「ああ、この尻尾の感じがまた・・・っ!!!」

と尻尾を握りつつ擦って悦に入っている俺から、まだ子猫は逃げようとしていた。

「ん・・・っ、やだ・・・尻尾くすぐりたいですっ!!!」

「はあ、はあ、はあ・・・も、もう駄目だ、食べたい・・・食つからなっ!!!なっ!?!」

「いや、トオルさんやめてっ!やめ　こ、これはこれで興奮しますね!!!」

「ちょっと忘れ物取りに戻ってきましたー!!!」

とそこで鏡が玄関のドアを開けて現れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばし呆然と俺たちを眺めていたが、

「それでは失礼ながら私も混ぜていただきますか。猫耳はどこ？私も付けるよ」

とドアを閉めて中に入って来た。

「ちょっと待てーい！」

その反射的に出てきたつつこみによって、俺は辛くも理性を取り戻した。

そしてその後、正気を取り戻した俺は、子猫に聞かされた自分の痴態を嘆くのだった。

<今日のボツネタ>

「ほらよ鏡、自分の持ってきたスイカ食ってけよ」

皿に乗せたスイカを差し出すと、鏡は若干不満足げな顔をして俺を見上げた。

「あー・・・うん、ま、いっけどね」

「……?」

「あはは。いやいや、どっちかというと種が欲しいかなってさ」

「な……お前、変な奴だな。種なんて」

「え?子供が欲しいと思うのは、女性として正しい欲求ではないかな?」

「おかしい、どこから妊娠の話になった……」

第十話 さあ早く！大人のキスで！

分かつているな、峰子。

ええ、もちろん。準備はすでに完了しています。

たまも峰子の手伝いお願いね？

うん。大丈夫。

すまないが、わしらはここを離れるわけにはいかない。だから、お前達に任せたぞ。

ご心配は無用です。必ず、連れ戻してきます。

「では、行ってきます。子猫の元へ」

会話はそこで終わった。

放課後、子猫は

「今日は先に帰って夕飯の準備を手伝ってきますね」

と言って、猫耳だけぴよこつと出した。

どうやらあれでも大分身体能力が上がるそうで、子猫は跳ねるようにして俺の視界から消えて行った。

「……猫耳……」

子猫は気が付いているだろうか。あの状態で俺に迫れば、既成事実を作ること不可能ではないかもしれないということに。

そして俺は、そうならないためにも理性を保たなければならないのだ。

・・・辛いぜ。

俺は自分を戒めるように首を振って、ゆっくりと歩き出した。

帰り道を歩いていると、猫神社の鳥居が見えてきた。

「そういや、あそこで子猫を拾ったんだよな・・・」

そうそう、ちょうどあんな風にダンボールに入って捨て猫みたいにさ。

・・・あんな風に？

「　　って、また・・・!？」

そう、そこにはダンボールに入った猫が居た。

しかも、今回は二匹だ。

何て奴だ、猫を二匹も捨てるなど・・・いや、今はそんなことを言っているわけではない。

問題は、俺はどうするべきか、だ。

もちろん拾ってやりたい。すぐく拾いたい。ああ拾いたい。というか食べたい。

でも、すでに家には子猫が居る。これ以上猫を増やすわけには・・・
・
だけど二匹とも個性があって何ともブリリアントだ。

一匹は珍しい真つ青な毛並みの良い猫。

もう一匹はやんちゃそうなドラ猫。

俺は目を逸らした。

「くっ、これ以上猫の描写をしてしまったら取り返しが・・・」

「・・・そうだ、あれだけ可愛い猫たちなのだ。きっと誰かが拾ってくれる。」

「・・・めん」

一歩踏み出した。噛み締めるように。

「本・・・ご・・・ん」

アスファルトの熱が、俺の罪を焦がすように責め立てる。胸が痛くなる。

俺は何て酷い奴なんだろうか。

「本当に・・・ごめん・・・っ!」

「で、猫を拾ってきてしまったと」

子猫は玄関で俺を向かえ、腕に抱えているダンボールの中を見てそう言った。

「・・・気が付いたらこうなっていた」

「見境無いですね。まるで」

「盛りの付いた雄猫とか言ったら殴るからな」

子猫が拗ねた。

「まあ猫の件は私もお手伝いしますよ。それより、早く夕食にしましょ」

「そうだな」

俺は家へ上がって靴を脱ぐために玄関にダンボールを置いた。

「・・・あ、この匂い。今日はハヤシライスだな？」

「気が付きました？でも、隠し味が入ってるんですよ。何だと思います？」

「そうだな・・・お前のことだから『愛情』とか言っただろ」

ぷっ。

俺の回答は子猫に笑われた。

「・・・」

「あはは、違いますよ。私の母乳ですって」

「いや、お前からはきつと一生出ないと思う」

「えへ、トオルさんに協力してもらいますから大丈夫です」

「まずそれが無い」

「じゃあ愛です」

「これが公開される時には、『愛情』に変えといてやるからな」

あれ・・・おかしいな、何で伏字なんだ？

子猫は俺のつつこみに頷いた後、こちらに向き直った。

「そうです、母乳は今すぐには無理だとしても

」

とそこで子猫の言葉が止まる。同時に笑みも消えた。

俺が疑問の声をあげる前に、肩に誰かの手が乗った。

「木下トオルくん、案内ご苦労様でした」

聞き覚えの無い声。

手の先を見ると、そこには

「・・・誰だ？」

知らない二人組が立っていた。

青い長髪を揺らし、女性は立っていた。
その傍らには金と黒の縞模様のような髪の色をした、腰ほどまで伸びているツインテールの少女が居る。

「私達？」

相手はそう言つて微笑んだ。
非常に奥床しげな印象の受ける笑み。

「私達が何者なのか、もちろん教えますよ。でもその前に一つ」

自分の体を指差す。

「服を着させて欲しいですね」

彼女らは何故か全裸だった。

「このままだと、あなたを襲いかねないので……はあはあ、じじゆる」

「……え？」

「……今この人、発情期だから」

呆けた俺に、隣の少女が注釈を入れてくれた。

「私は猫神峰子。猫神家の長女です」

服を着た碧髪の女性はあっさりと素性を明かす。
もう一人を見る。

「で、こちらのお子さんは？」

俺がそう問うと、

「お、お子さんっ！？私はこれでもお前より十数年は長く生きてる
！！」

「へえ、てことは30代かそこらか……それでその身長はな
あ……」

「哀れむな——！！！」

怒り方と身長は立派に子供だった。

「猫神たま。三女」

たまと言った少女は、不満気にそう自己紹介した。

「猫神峰子に猫神たま……ね。あれ？もしかして……？」

子猫を見ると、不安そうな顔で

「……はい、私の姉と妹です。私は次女ですので」

子猫は静かに答えた。
なるほど……つまり、俺が拾ってきたのはまたもや猫神だったと
いうことか。

しかも、どうやら子猫への道案内として利用されたいらしい。

「えっと……それで、何の用です?」

「端的に言わせてもらいましょう。私達は、子猫を連れ戻しに来た
のです」

「子猫を……?」

峰子は子猫を見た。

それに子猫が怖気づくように一歩下がるのが分かった。

「子猫……」

「トオルさん……」

子猫に向かって、俺は出来るだけ優しく言う。

「じゃあな」

「……ここはキスの後、溢れる欲望に任せ体を重ねる……とい
う流れでは?」

「ははは」

残念ながら聞く耳持たない流れだった。

しかし子猫は、しぶとくも俺にしがみ付いた。

「い・・・嫌っ！私この家から・・・何よりトオルさんから離れたくない！！」

子猫の力は強く、なかなか引き離せない。

「くっ・・・何でそこまでしてここに居たがる？どんな不純な理由があるって言うんだ？言ってみる！」

「純粹です！！わ、私・・・」

峰子に向かって強くはつきりと言い、涙目で俺を見つめた。

「・・・私、まだトオルさんと性行為してない！！お願いしますトオルさん、この際家族の前でもいいですから犯してください！！さあ早く！早く大人のキスで孕ませてください！！！！」

子猫はもう気が動転しすぎて言動の全てがおかしかった。

峰子は子猫の不純な動機を聞いて、一つ頷いた。

「……………分かったわ、子猫」

「峰子姉……………」

「あなたがそこまで彼にご執心なら仕方が無いわね。ここで住むのを認めてあげる。でもその代り……私もここに住んで彼があなたに相応しいか見極めるわ」

「本当？」

「ええ。あなたも本気みたいだし」

「峰子姉ありがと！」

そんな話の後、先ほどの緊迫した空気はどこに行ったのやら、二人はわいわいと楽しげにリビングに入って行った。

玄関には、俺とたまが取り残される。

「……………え？もしかしてあいつ、こんな流れでここに住み着くの？俺の意志は無視して？」

と俺が呟くとたまが気だるそうに言った。

「まあ、諦めが肝心じゃない？」

「とか言いつつお前も家に上がるなよ……………」

この日から、猫神見習いが三人に増えました。

誰一人として戻ってこないな。

ミイラ取りがミイラになった、ってやつね。

大仰な溜息が、二人から漏れた。

<今日のボツネタ>

「・・・あ、この匂い。今日はハヤシライスだな？」

「気が付きました？でも、隠し味が入ってるんですよ。何だと思えます？当てられたら勝負下着をプレゼントしますよ」

「はぁ・・・まったく実用性が無い物だな」

「え？でも脱ぎたてでしたら良いオズとして使えるんじゃない？・・・」

「今そういう実用性求めてないから」

「でも実際どれくらい使えますかね？はい、どうぞお試しあれ」

「脱いだのをこっちに突き出すな」

「てか何で濡れてるの？」

第十一話 NTRは認めない

猫神三姉妹が揃ってしまってから、家の中はさらに賑やかになった。

これは某人生系ボードゲームを行っているときの話だ。

「フマス・・・あ、また子供が・・・」

俺の操る駒には、数人が車から落ちストリートチルドレン化するほどに子供が産まれていた。
だが、それでもなおまだ増える。

「こんどは双子か・・・」「え？三つ子？」「うわ、場所戻っちゃまったらまた双子出た」

そこでふと峰子と子猫を見ると、二人とも顔を少し赤らめ生唾を飲み込んだ。

子猫と峰子が口を開く。

「こ、子だくさん・・・」

「やりまくり・・・」

「産んでは種 け産んでは種 け・・・」

「危険日を狙って中 し・・・」

「あんたらこのボードゲームを18禁にする気ですか？」

「妻のお腹は精 タンク・・・」

「そのうちに子供とも・・・はあ、はあ・・・近相よ！」

「な、何て羨ましい家族愛・・・っ！」

「いい加減戻って来いや！」

ゲーム中盤、トップはたま。

黙々と、しかし心なしか意気揚々とルーレットを回す。

「4・・・と」

そして止まったマスは、何とも無情なホワイトプラン。
ふりだしに戻る、だった。

「・・・っ!？」

驚愕の表情と共に、自分の駒をスタートに戻す。

コッ。

空しい音が、駒から鳴った。

「・・・そんな・・・私の築いてきたものが全て・・・？」

震える手で、それでも諦めずにルーレットを回す。
何て健気な光景なのだろうか。
俺は、震えて涙目になっているたまの頭を撫でた。

「よしよし、良い子だ」

「ぐす……子供扱いするなっ！」

そして手を振り払われた。
本当に健気だ。

たまの失脚で、トップは子猫になった。
俺は子作りに励み過ぎて駒が前に進まず最下位。峰子はちょうど俺と子猫の中間辺りに居る。
ふふふ……と子猫が不気味に笑い始めた。

「いいでしょう……そろそろ、神の力を見せてあげますよ！！猫
神モードッ！！」

猫耳と尻尾を生やし意味不明なポーズを取ったかと思うと、思い切りルーレットを回す。

出たマスは10！

な……こいつ、馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、力だけは本物だ……
・！

「ふふふ……あははははっ！！」

また10！

「まだイキますよ！！」

またまた10！！！すげえ猫神！（明らかに力の無駄遣いだが）

「もう・・・私を止めるものは何も無い！！！！まさにボードゲームの神！これからは私の時代が」

そして子猫の駒は、吸い込まれるように
ふりだしへ戻るのマスへ・・・

「来・・・る・・・」

そのあまりの愚かさっぷりに、誰も声を掛けることが出来なかった。
部屋の隅でうずくまる子猫は、寂しいのか逆に声を掛けてくる。

「うええん・・・トオルさん、私の頭も撫で撫でしてください。
ほらほら猫耳ありますよ？」

「それでもお前は自業自得だから嫌だ」

流石の俺でも容赦はしなかった。

劇的な首位転落により、今度は峰子が先頭に立った。

峰子はマイペースで着実に駒を進めていく。

ふと、峰子が

「ねえトオルくん、これを買ったのはいつの話？」

「これは小学生の時に……でもどうしてそんなことを？」

「うん……このゲームに『寝取りシステム』が搭載されてないから」

「何それ、このゲームに必要？」

某ボードゲームのブラック&ビターでもそんなものは搭載されてない。

ふりだしに戻った子猫は完全にやる気が無かった。

そこで、峰子が提案した。

「一部のマス面白く変更したらやる気出るんじゃない？」

ということでした。ばし改装中……

「よし、これで完成！さあトオルくんの番だったわね、どうぞ」

「ん、分かった」

俺はルーレットを回す。

5が出た。

「2、3、4、・・・5と」

すると、早速新しいマスの上に乗ってしまった。

「何々・・・・・・・・え？二位の人と四位の人がディープキスをする？」

うわ、何て王様ゲームだ・・・

「やった！トオルさん二位で、私四位！」

だがしかし、子猫のヤル気の方は出たようだ。

「やめろ、誰がお前と・・・！だあつ、離れろ！」

「えへへへ・・・・・・・・」

俺たちがそうしている間にも、たまは淡々とした面持ちで駒を前へ前へと運んでいる。

「・・・お前はこういつの、ずいぶん慣れてるみたいだな」

「まあ、毎日一緒に過ごしてたらね。あんたも大概の事は気にならなくなるくらいにならないとやっていけないわよ」

「な、何て過酷な生活を続けてきたんだお前は・・・・・・・・」

この時ばかりは、たまが俺より大きく見えた。

「あ、このマスは！」

子猫が嬉々として俺に向かって言う。

「寝取りマス！」

寝取りマス。それは他プレイヤーの妻、または夫から他プレイヤーを寝取るというまさしく魑魅魍魎を体現したマス！

そして『寝取りマス』と宣言して相手から奪うという、圧倒的な戦力差を暗に表すかのようなマス名！

これは嵐が来るぞ……！！

「えー峰子さん、モノローグを奪い去つてのマス説明どーも」

峰子は満足げに、気にしないで、と手を振った。

「私はもちろんトオルさんを寝取ります！！！」

「でも、それをやるとプレイヤーが一人減るから実行不可能だと思
う」

なので無効。

「あ、私にも双子だ」

未だ健気に駒を進めているたまは、そう言って車に子供を二人乗せた。

「………たまが子供……か。」

ふむ、しかしあの成長状態で双子を身ごもるとすると

「誰だあ、今子供の方を心配してる奴!!」

怒られた。

未だ首位の峰子は、もう少しでゴールしそうだった。

「よし、ゴールまであとちょっとよ!」

と、辿り着いたマスを見ると、そこは改変されたマスだった。

「あらら? 『ふりだしに戻る』って書いてあるわあ?」

「何でよりもよってそこに作った!!?」

峰子は悔しげに目を伏せ、やがて

「う……うう……ば、ばぶー」

「そっちのふりだしで誤魔化すな」

なんと人生のスタートラインに立ってくれました。

最終結果は、どん底から這い上がったたまが一位。次いで俺が二位。子猫が三位で峰子は四位となった。それで、と峰子が切り出した。

「実は今回のゲームは、私たちのこれからの主従関係を決めるものだったの。この中では、たまちゃんが一番偉いわねー」

「じゃあまず『ちゃん』付けしないでもらえる？峰子姉」

「じゃあ・・・たま様？」

「そうそれ」

「時にたま様。この前の身体測定、特に身長測定結果を聞いておりませんが？」

「お、おおお前はもう下がれ！」

どうやら芳しくないようだ。

俺は身を乗り出して峰子に食って掛かる。

<今日のボツネタ>

「・・・あ。会社が破産・・・！？うわ大損害じゃん」

俺がそう言っただけで金を払っていると、峰子が不満げにこう呟いた。

「人生を模したゲームのくせに、なんかイマイチ縮図って感じがしないわよねー」

「何をいきなり。じゃあどうだったら縮図っぽいんだよ」

そう問うと、峰子は腕を組んで少し考え込んだ。

「うーん、そうね。例えば、破産したら自殺する、とか・・・妻が他の男の子供を身籠ったので男共々殺してしまう・・・とか？」

それにしてもこの女、どうしてもNTRが気になるようである。触れてはならないけど。

「そんなの倫理的にもシステマ的にも無いだろう」

「え・・・あれ『りんり』って何だっけ？」

「そんなトコから理解できてないなら、お前の脳みそはもう終わってるよ」

「え、そう？でへへ・・・」

やめろ、こんな罵倒で悦に入るな。

第十二話 まさかお前も乗馬マシンで!?

今日は月曜日。

また五日間、変人たちの巣窟に足を踏み入れるのだ。

・・・何だか胃が痛くなってきた。

朝。

俺と子猫は靴を履き、声を掛けた。

『いってきまーす』

「ああ子猫、忘れ物よ」

峰子がそう言って玄関に現れた。手に何か持っている。

「はい。ペンカメラ」

「あ! うっかりしてたあ。ありがと峰子姉」

子猫はそう言ってペンカメラを受け取った。

俺は危険な匂いのするそのやり取りを見て、訝しげに詰問した。

「子猫・・・そんな物何に使ったよ?」

それに、子猫は軽い口調で答える。

「えへ。子供が出来なかった時に、物的証拠として提示するんです」

「さーて、今日は一人で登校だ！」

襲われる！

トオルが慌てて、子猫が荒い息で襲い掛からんと出て行った後の玄関。

「学校ね……」

呟いて、峰子は玄関のドアに背を向けた。

「……峰子姉、何をするつもり？」

たまがそう問うたのは、峰子が黒い笑みを浮かべていたからだ。

「賢いたまちゃんなら、もう分かってるでしょう？」

「……まあね。でも、今回は賛成」

たまも、少し微笑んだ。

「木下トオル！」

校門で呼び止められた。

振り向くと、そこには長い黒髪を揺らす生徒会長秋元千鶴と風紀委員の葛西由紀が。

登校状況の確認か、目を光らせて立っている。

「えと、今日は何ですか？今ちょっとヤバイんです。うわっ来た！」

「なっ……そ、それは気が付かなくてすまない！」

秋元は驚くと、すぐさまティッシュを差し出した。

「使え。イキそうなんだろう？」

「千鶴、もしかしたらオナールの方が良いのかも知れないわ」

「なるほどそつちか！だが今は持ってない……よし、構わず私に出すんだ！！」

「あー駄目だ。この人たちは無視しよー」

朝から校門で不謹慎な単語を並べる彼女らだったが、今つっこみをする余裕は無かった。

昼休み。

俺は弁当を食べ終わったので机に突っ伏して寝ていた。子猫は鏡と図書室に行ったそうだ。

「で、子猫ちゃんは何の本を探してるの？」

「えと……恋愛関係の本を」

子猫が答えると、

「官能小説は置いてないなあ……私もずっと頼んでるんだけどね」

「それでは仕方無いですね……とりあえずこの、人間の生態に關した本で我慢します」

「だったらこっちの本も、著者の性癖が滲み出てて面白いよ？」

「良いですねコレ！あ、その本も淫らそうですね」

「これ？うん、確かに細かい言い回しがちょっといやらしいかな」

「うーん……こういう本と自分のを比べてみるのも面白いかもしれません」

「あはは、だったらトオルくんに協力してもらったら良いんじゃない？」

こんな会話が交わされ続け、

（……早く帰ってくれ）

睨む図書委員が居たという。

そして放課後の家。

俺は風呂に入ろうと居間に顔を出した。

母さんはテレビを見ていて、子猫が乗馬マシンに乗っていた。

乗馬マシンは母さんが通販で買った物で、意外にも頻繁に使っているのだが・・・

今は子猫が使用しているということから、子猫が無理を承知で頼んだということになる。

「子猫。もしかしてダイエットでもしてるのか？」

と一応確認してみると、

「え？違いますよー」

そう返って来た。

「これは騎 位の練習です」

「母さん、こいつ今すぐ引きずり下して」

要らんスキルを磨いていた。

風呂上り。

居間を覗くと、乗馬マシンはまだ稼働していた。
しかし今度乗っているのはたま。

「あれ、たま？」

とたまに呼びかけると、

「わっ！な、何っ？」

思いのほか驚かれた。

続けてたまは、乗馬マシンに乗りながら強気な口調で言うてくる。

「いや、えつとこれはその……あ、遊びたかったとかそんな
子供っぽい理由で乗ってないんだから、勘違いしないでね！」

「ん？ということとは、まさかお前も騎 位の 」

「それは一番ありえない」

呆れられた。

しばらくテレビを見た後、居間から出た。
すると、ちょうど風呂に入ろうとしている峰子とたまに会った。

「あ、二人で入るのか？」

「ええ」

「何か文句あるの?」

たまが、高圧的な態度で俺に問い返す。

「いや、無いけど。仲良いんだなと思って」

俺の言葉に、峰子が頷いた。

「そうね。私、たまちゃん可愛いから好きよ?」

「み、峰子姉、こいつの前で子供扱いなんかしないでよっ」

「んー?でも、シャンプーハット使ってるたまちゃんとかすごく可愛いわ?」

「言うなー!!!」

顔を真っ赤に染めて姉を責めるたまは、傍から見たら本当にただの子供だった。

次の日の朝。

俺はまだ夢を見ている。

初めて買ったベッドが家に届いた日の記憶が、夢になって出て来ていた。

当時の俺にとってベッドは、バネの反発がすごく、まるでトランポリンのような遊び道具に等しかった。

何十分何時間と飽きずに跳ね続けた。

寝転がっても、体を跳ねさせ遊んでいたはずだ。

ああ、思い出す。体全体が重力から解放されるこの感覚。

軋む音も、どこからか耳に響く。

夢見心地で薄っすらと目を開けると、パジャマ姿の子猫が仰向けの俺の股間付近に跨って体を上下に跳ねさせていた。もちろん動作だけだ。

「・・・・・・・・」

俺が白い目で見つめると、子猫は俺が目を覚ましたことに気が付いた。

「はぁ・・・はぁ・・・んぁ、あっ・・・イ、イク・・・ッ！」

「いいから退け」

最悪の目覚めだった。

学校では鏡に秋元に葛西、それにもちろん子猫が俺に絡んでくる。

だがその相手をするのにも限界というものがあるのだ。

しかしそれでも、人生は時に試練を与える。

それがこの時なのだろう。

俺はこの日、それをこの身で感じ取っていた。

教壇には、何の虐めか金髪と黒髪の混じり合ったツインテール少女、つまり猫神たまが立っていた。

それすなわち、俺のクラスに転入してきたということ。
どうやって、とはもうあえて聞くまい。
しかし、どうして？

「私は猫神たま、よろしく」

たまは、俺の心境など意に介していないかのように不敵に微笑んだ。
・・・胃が痛い。

「ふうん・・・それでねえ」

説明を訊くと、たまはどうやら俺への監視役としてこの学校に入っ
たのだと言う。

「子猫姉に手を出したら、許さないから」

と、キツイ睨みとお言葉も共に。

「手は出さないって」

俺は真に心から言った。
が、

「そつだよ、トオルさんが出すのは手じゃなくて精だもん」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

二人とも絶句。

「あ、その前に（自主規制）」

しかもつつこめなかった。

教室での出来事。

鏡の発言。

「ねえねえ、たまちゃん。たまちゃんって子猫ちゃんと同じ苗字だよね？」

「……そうだけど」

「っていうことは……二人遂に子供産んだんだね！おめでとう！」

「……ねえ、この人殴っていいの？」

たまが無表情で確かめてきたので、俺も事務的に頷いた。

校内を案内しているときの出来事。
生徒会長秋元と出会った。

「木下じゃないか……ん？その子は……？」

「私は猫神たま。猫神家の三女」

たまの自己紹介に、秋元は驚愕の色を示した。

「お前・・・ロリコンだったのか!？」

「俺に対する驚きかよ」

「待て、私は30歳を超えている!むしろ熟女だ!」

「そのつつこみもどつかと思うぞ!?!」

風紀委員の葛西とも出くわす。
たまを見て一言。

「この子の性癖は何なの?トオルくん」

「由紀先輩ちょっと待ってください、それを訊いてどうするんですか」

「ただの調きり・・・スキンシップをしようと思って」

「由紀先輩・・・」

よもや調教までとは・・・!

保健室には、塩谷可南子が居た。
俺たちを一瞥する。

「ん・・・トオルか。S Mプレイをするんなら、一番奥のベッドに
レオタードと鞭とヒールと縄や猿轡・・・まあ一式揃ってるから好
きにしろ」

「違います」

「すまん、手錠は今私が使ってるんだ」

「ああもう、何なのこの学校？」

「私に訊かないで」

クラスメイトに生徒会長や風紀委員、さらには教師がこれなので、
逆に俺が訊いてしまっていた。

案内が終わって教室に戻る。

「峰子姉も来るって言ってただけど、どうしたんだろ」

たまが不安そうに呟く。

「何でそんなに俺を監視したがる・・・」

「私はそうだけど、峰子姉は単純に学校に来たかっただけだと思うわよ」

「ふうん、そうなのか・・・」

・・・でも、確かにどこに居るんだろう。校内を案内しても会わなかったな。

意外とつまらなくて飽きて帰ったってところだろう、と俺は思っていた。

その日の午後の授業は体育。

今日はグラウンドでサッカーだった。
体育教師が整列中の俺たちの前に立つ。

「えー、今日から新しい体育教師が就く。猫神峰子先生だ」

と紹介されて出てきたのは、まさしく碧髪長身の峰子。

俺たちは少し驚いた目で峰子を見ていた。
まさか体育教師として来るとは・・・。

「猫神峰子です。よろしくお願いします。趣味は穴掘りで、まだお腹の皮は傷付けられていません」

・・・???

という感じに空気が凍てつくのを感じて、俺はすかさず

「あー、たぶん男性経験が無いって言いたいんだと思いまーす」

フォローを入れた。

雌猫は交尾の際にお腹の皮を傷付けられることがあるという。
でもそれを主張する意味が分からない。

趣味の方は気が付かないフリをした。

グラウンドでは、コートを二つに分けて試合を行っていた。

「サッカーの試合、初めて見たわ」

と峰子が言う隣で、子猫とたまも頷く。

「感想はどうだ？」

「つまらないわね」「つまらないです」

峰子と子猫が声を揃えてそう答えた。

「え？」

と俺が怪訝な顔を見ると峰子と子猫が、

「球蹴りって言うから、こっ……男の人の玉を蹴るスポーツかと」

「私も、玉を受け渡したり投げたり潰したりもするのかとばかり……」

「それ、どんな地獄絵図だよ……」

悪夢のような玉蹴りだ……。

放課後、たまと峰子も共に帰っていた。
ふと思い出し、俺は峰子に問うた。

「そついえば、峰子は何で学校に来たんだ？しかも体育教師」

「そつよ峰子姉。私にも何も言っていないし」

たまも少し責めるような口調で俺に同調した。

「んー……やっぱり、健全な肉体は健全な精神に宿るといっから
ね。皆に心と体を鍛えて欲しいなって思ったから、体育教師にしち
やった」

笑顔でそう言う峰子。

「峰子……」

なんだ、峰子も案外と

「それと、皆美味しそうだし」

「・・・お前はおよそ健全じゃねえんだな」

むしろお前が鍛えろ。

と思っていると、子猫が頷きつつ言う。

「分かるよ峰子姉。私もトオルさん食べたいもん」

「・・・子猫は今後俺の傍に寄らないでくれるか」

目が本気だった。

<今日のボツネタ>

乗馬マシンに乗ったまま、子猫は俺に話しかけてきた。

細かい動きで子猫は姿勢を保つのでさえ大変そうなのだが。

「あの、トオルさん・・・」

「どづした？」

「お風呂に行かれるのですよね？」

「ああ、そうだけど」

「今なら汚れても大丈夫・・・ですね」

「何かあったのか？」

「ええその・・・もう少しで達しそうなので、出来ればその後の処理をお願いしたいっ・・・です。お風呂場まで連れて行って、そのまま全身をくまなく洗っていただけますか・・・はあっ！く・・・すみません、おしっこ漏れそうなんです。」

と子猫は紅潮した顔で恥ずかしそうに俺を見つめた。

「・・・良いけど、俺たぶんお前と口利かなくなるぞ？」

「・・・嫌なら口から飲んでください」

「何でその二択なの？」

乗馬マシンのコンセントを引っこ抜いた。

第十三話 つっこみの夏、木下脱力の青春時代

夏休みに入ったと同時に、本格的な夏が来た。
日差しは強いし蝉が五月蠅い。

「あ〜っ〜い〜」

と子猫が俺の部屋に来てベッドの上で喚き転がっている。
寝巻きを着崩しているので本来見えてはいけない所が見えているの
だが、それはあえて無視している。

「だったら居間に行け居間に」

そう冷たくあしらうと、

「だって居間にはクーラーあるじゃないですかあ」

だから行けって言うてんだろうが。

「むう、私はお願いしているんですよ？」

「そんな態度には見えないな」

「・・・なるほど」

何かに納得した子猫は、姿勢を正してそれからこう言った。

「海に連れて行ってください。お願いします」

「無理だ」

俺はきつぱり断るが、

「ではこれではどうですか？」

子猫は一度直した服を再び脱ぎ始めた。

「・・・やめる」

「分かっています、チラリズムに止めておきますから」

「そうじゃねえ」

今さら全部脱ぐ脱がないで俺は何も言わない。

「ちなみに下着は穿いてません」

今度はどうでもいい追加情報が来た。

「コツチの準備は万端です！何故ならさっき慣らしてましたから！」

そして脈絡が無い。

とりあえず居間に投げ捨ててきた。

今度はたまが来た。

子猫に頼まれて、海に連れて行ってくれとでも言ってくるのだろう。

「子猫姉が言ってた」

「何て？」

「シたいてって」

「主旨変わってるって伝えてあげて」

どうやら暑さで脳みそをやられてしまったようだ。

家には車はある。とはいえ何があっても俺は行く気は無いし、免許が無いから運転できない。そもそもこの歳では免許が取れない。と、そう思っていた矢先に鏡から家に電話が掛かってきた。俺はたまたま居間に居たので、すぐに受話器を取った。

「もしもしトルくん？これから海行かない？」

ああ・・・お前はタイミングが途轍もなく悪いな！！

さらに、立てていた子猫の猫耳が反応するのを、俺は見逃さなかった。

「残念だが」

「行きますっ！！」

うわ、接近早っ！
そしてさりげに受話器を奪われたっ！

「ん？子猫ちゃん？」

「鏡さん、今すぐトオルさん家に来てください！皆で行きましょう！トオルさん家には車ありますから！」

「コラ勝手に・・・第一誰が車を運転する？」

俺がそう尋ねると、意外な人物から返答が来た。

「私持つてるわよ？」

と言ったのは峰子。

「ちゃんと自動車学校に通ってね」

「な、どうしてそんな余計な事を・・・」

「だって上手くなるって聞いたから・・・バックで入れるのが」

「なるほどそれでかー」

真面目に自動車学校通うわけ無いもんなー、アハハ。
って納得する俺が居たことが一番怖い。

結局俺の意志は無視して、海に行くことになった。
鏡が来たというので、子猫に無理に引つ張られ、俺は仕方なく用意
をして外に出た。
するとちょうど前を通りかかった秋元と葛西と会う。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

秋元と目が合うが、俺は無言のまま車に乗り込もうとする。

「ちよつと待て、まずそこは『一緒に海に行きませんか？』って誘
う所だろ」

「何で海行ってくつて分かってんだよ」

まずそこだよ。

「ていうか、家の車は最大五人までなんで、たぶん乗り切れませ
んよ」

と秋元に言つと、

「大丈夫だ。君は瞬間移動が使えるという設定だ」

「俺は孫 空か」

「いや、白井 子だ」

「残念ながら知らねえよ」

どちらにせよ無理だ。

秋元ともめていると、峰子が横から話に入ってきた。

「それに関しては方法があるじゃないの。トオルくんの上に、たまが座る」

しかしその提案は、意外にも鏡・秋元・葛西に止められた。

『それは犯罪ぽいから駄目』

・・・分からなくてもない。

でも、たまが泣きそうになってるからほどほどにしてやってくれ。

・・・ということで、結局たまは後部座席の鏡の上に乗る、俺は助手席に乗った。

峰子は運転席、秋元と葛西は後部座席。

そこで問題なのが、俺の上に子猫が乗っているということだ。

「これが理想系ですね」

「俺、やっぱ行くのやめるわ」

とドアを無理矢理開けたが、

「駄目です！女子ばかりなんですよ？変な男の人に騙されて犯されたらどうするんですか！？そうしてトオルさん以外の人と快楽に溺れてしまったらどうするんですか！？」

「え？それこそ理想系じゃ・・・？」

俺、解放されね？

遂に車は発進し、俺たちは海へと向かう事になった。
車が段差で跳ねるたびに、子猫が身じろぐ。

「トオルさん、くすぐりたいです」

「あ、悪い。手を何処に置こうか迷っててな」

「違いますよ、トオルさんの股間がむくむくと私を刺激するんです」

「嘘吐くな。・・・ああもう、後ろから変な視線来てるから」

「あと、手は胸を優しく包み込む感じで、簡単に言うと手ブラのよう
うにしてくださいと助かると助かります」

「このままだと危険なのは認めるけど、それはしない」

シートベルトを掛けさせた。

白い砂浜、穏やかに打ち寄せる波。

「海に来たぞー!!!」

子猫が水着を着替えて一番に登場した。

この場合の一番とは、俺の後から、である。

俺は男なので着替えに時間は掛からない。

子猫はこの前購入したフリルのついた水色の水着を纏っていた。

「勝手にはぐれるなよ、猫神子猫」

「まあ、学校の外だからある程度は良いと思うけど、私達が一緒だからねえ……悪いことしちゃったかしら」

続いて現れたのは秋元と葛西。

秋元はバランスのとれた体を、白のビキニで際立たせる。

葛西は黒のビキニ。そして制服では判断出来なかったが、意外に胸が大きいことが判明。

と言うと子猫や秋元が貧乳のように思われるかもしれないが、子猫は比較的大きい方だと言える。

秋元は……おっと、峰子とたまが来たようだ。

「みんな可愛いわねー」

との発言は、全ての女子を凍りつかせた。

・・・胸が大きい。葛西を遥かに凌ぐまさかの大きさだ。強調するような際どい赤の水着を着ているのでなおそう見える。

「おお、スイカを持つてくるとは気が利くな」

あまりの事態に、秋元が現実から目を背けた。

たまは俺に向かって厳しい視線を向けてくると、俺に近付いてきた。

「・・・？」

「アンタ、周りが女の子ばかりだからって、浮かれないよね」

そう釘を刺された。

「ああ、うん・・・」

ちなみに彼女はワンピース型のピンク色の水着で、浮き輪を腰で固定し、シュノーケルを装備していた。頬が赤い。

「・・・何？」

「いや、何も」

分かりやすい。

「まず、せつかくなので生徒会長から皆さんに一言注意を」

と葛西が秋元に注目を集めさせた。

「えー、こほん」

一度間を置いて、それから話す。

「今日は天候にも恵まれ、絶好の海水浴日和だ。皆、日頃の疲れを癒すためにも精一杯楽しんで欲しい。そうは言っても、精一杯出すのは良いがゴムは付けるように！」

「注意限定的過ぎだろ！」

あと色々解放しすぎ！

葛西が一人で腰ほどの高さの浅瀬に立っていた。

「由紀先輩、一人で何してるんですか」

「ちょっとサーフィンを楽しんでるの」

「サーフィンって・・・ボードがありませんよ?」

ぼこり・・・

葛西の足元から気泡が上がってきた。

「なかなか浮き上がらないの、このボード」

ぼこぼこ・・・

葛西が足元に向かって言う。

「時間が経てば経つほど浮かべなくなるわよー」

「死ぬ前に止めてあげてくださいね?」

秋元の調教中だった。

ビーチパラソルの下では、一応保護者役の峰子が休んでいた。

「あれ? たまは一緒じゃないのか?」

訊くと、

「あそこに居るわよ?」

指差す方向を見ると、そこには砂に埋もれたたまが寝転んでいる。

人型に砂を掛けられていたが、胸の膨らみが必要以上に大きいのを見て、

「切ねえ・・・」

と呟いてしまった。

「あ、トオルさん探しましたよー」

子猫が向こうからやって来た。

「サンオイル塗ってください」

「峰子に頼めよ。今暇そうだから・・・っておい」

峰子はすでにつつ伏せで塗ってもらう体勢になっていた。

「せっかくだしね」

とそこに、

「あら、そういうば塗り忘れてたわ。木下くん、塗ってくれるかしら」

「木下、私も頼む」

葛西と髪の水にわかめを乗せた秋元が登場して、さらに

「あ、私も」

たまもうつ伏せになった。

総勢五人がうつ伏せに並んでいる。

「ちょ……誰か手伝って」

ていつか周りの目が何か怖かった。

俺は最後の一人、子猫にサンオイルを塗っていた。

「五人目になると慣れてますね。流石経験者です」

「嫌な言い方をしてくれるんじゃない」

「トオルさんが背中を摩るだけでイカされそうです」

「それが良い言い方になる理由は何だ？」

「あの、前もお願いできますか？」

背中を塗り終わると、しかし子猫はそう頼んできた。

「前は自分で出来るだろ？」

「して欲しいんです」

溜息。

「自分でしろ、自分で」

と断ると、急に仰向けになって俺の頭を抱くようにして胸に引き寄せた。

「わぶっ」

「してくれなきゃ、このまま窒息させちゃいますよ」

さらに力を込める。

「んー！んー！んー！んー！」

「してくれと言ったのでしたら、乳首を二回つねってください」

「嫌だ」

はっきり言えた。

トオルにサンオイルを塗らせたので、安心して海に入って遊んでいくと、

「と、タオル！な、何か、股間が・・・」

「ん？・・・うわ、何だこれ！？」

タオルの水着に貝が入ったのだろう、股間の所が膨らんでいる。

指摘したのは良いのだが、私が流石に手をつ込んで取る、というのは出来ないのです

「えっと・・・」

「・・・いいよ今は。皆見てるし、後で取る」

「まあ！タオルくん、欲求不満？しかも貝なんて・・・（はあと）」

「今すぐ取りまーす！」

峰子姉のあざとさに流石のタオルも屈したようだった。

「・・・つか、鏡どこ行ったんだ？」

「え、京子？・・・そういえばさっきから見ないわね。何かあったのかしら」

ということだとたまと鏡を探していると、砂浜のはずれの方に彼女は立っていた。

黄色の水着を着て、上はシャツを羽織っていた。

「おい鏡、こんなところで何してんだよ」

「んあ？・・・何だトオルくんか」

鏡は機嫌が悪いのか、溜息を吐きながら俺に振り返った。足や髪が濡れてないので、水に浸かってないのだろう。余計に何をしているのか気になる。

「何だとは何だよ、何もしないで立ってるなんて正気じゃないぞ」

「失礼だなー、これでもナンパ待ってるんだよ」

「・・・は？ナンパ？」

「そう。でもトオルくんのサイズより大きい人からは一度も声を掛けられてないよあ・・・もうトオルくんが良いかなあ・・・ねえ、青　しよつか？」

「たま、あそこの店でフランクフルト買ってきてくれ」

「ジャンボが良い？」

「よろしく」

「何々、トオルくん？私の後ろの穴を火傷させる気？なんか興奮してきたよ！」

「とりあえずお前の口を塞ぐ」

確かに鏡は正気ではなかった。

・・・ん？その前に何であいつは俺のフランクフルトのサイズを・・・？

俺はたまと全員分のドリンクを買いに行った。

おもむろにたまが口を開いてこんなことを言ってきた。

「あんた、何か疲れた顔してるわよ？つっこみ疲れ？」

「・・・そう思っただったらたまがつっこんでくれよ。（子猫たちで）慣れてるだろ？」

「それでも嫌よ。それに、あんたのつっこみの方が（労力的に）良いもの。あ、そうだ。私にもつっこんでもらおうかしら」

「うわ、キツイぜ・・・」

「ふふ、頑張りなさいな」

というエロネタに対するつっこみ担当同士の、他愛の無い会話だったが・・・

「と、トオルさん・・・すでにたまとつっこみつっこまれる仲を築いていただなんて・・・うわああああん！！！」

それを聞いていたらしい子猫には、何か誤解する要素があったよう

だった。

走ってどこかへ行ってしまった子猫を探して、俺は岩場に来ていた。

「おーい、子猫ー」

周りを見回していると、どこからかすすり泣く声が聞こえた。

「どこか？」

と、岩陰を覗き込む。子猫が座り込んでいた。辺りには血が散乱している。

「子猫……これは……」

「と、トオルさん！？あ、あの、いえこれは」

俺に気が付いた子猫が慌てて説明を加える。

「べ、別に処女を奪われたわけじゃないんだから勘違いしないでよねっ！」

「分かってるよ」

何でツンデレ風なんだよ。

俺は子猫の傍に寄り、子猫の足に怪我があることを見て取った。

「これじゃあ歩けないだろ。ほら、おぶってやる」

「あ……ありがとうございます」

子猫は俺の誘導に素直に従って、背中に体重を預ける。浜辺を、皆のところに向かって歩いていく。

「あの……トオルさん」

「ん？」

俺が訊き返すと、子猫は小さく首を振って

「……いえ、何でもありません。少し疲れたので眠らせていただきますね」

そう答え、肩に顔を乗せて眠り始めた。

脱力した体からは、胸をさらに背中に押し付けるかのような重みが感じられた。

疲れた……か、きっと初めての海だったのだろう。と俺はわけもなく子猫に憐れみを感じた。

何しろ神だからな……今まで出来なかったことが多いのだろう。少しでも普通の人間のような体験をさせてやりたいところだ。そう思って、だがかなり面倒だな、と微笑を浮かべた。

それと、俺は子猫が寝たフリをしていることに気が付いていたが、この美しい夕陽の前でそれは興奮めだろうかと思って指摘するのをやめた。

「・・・あ、トオルさんから伝わる振動で股間が濡れてきました」

「全部台無しだよ」

もう少いでキレイに終わったのに・・・。

第十四話 そんなの入らないよおおお！

俺は悩んでいた。

悩み・・・それは第九話での俺の痴態である。

俺はあの時、理性を失って子猫に・・・

「はぁ・・・最悪だ」

溜息を吐きながら部屋を出ると、ちょうど峰子に出くわした。

「あら？溜息なんか吐いちゃってどうしたの？」

「ああ、こんな自分が何か悩ましくてな」

「悩まし・・・なんだ、賢者モードなのね」

「ごめん、ちゃんと説明するから」

俺の真剣な悩みが汚された。

「・・・狂気的な猫好きを直したい？」

「ああ。猫好き自体は問題ないが、ある程度落ち着けないと今後良くないと思っつてな」

猫神姉妹にも迷惑が掛かるだろうし。

峰子に言つと、意外にもきちんと悩みに乗ってくれた。

「そうね・・・それなら」

そして峰子が提示した克服案は・・・

「ちょっと待て・・・それは・・・はは、こりゃ駄目だ（泣）」

とりあえず全てカットさせていただきました。

たまに相談してみたところ、

「やっぱり慣れることが大事なんじゃ？」

とのこと。

なので、まずはたまに猫耳を出してもらって、それを黙って見続けることから始めた。

が、それだけでも鼓動の高鳴りが凄まじい。

駄目だ、我慢だ我慢・・・はあ、はあ・・・ああ、食べたい食べたい食べたい食べたい食べたい・・・ッ！

いや・・・そうだな。食べよう、うん。

「ちよ、怖っ！？・・・よだれ出てるし。本当に大丈夫？」

「たま・・・た、食べ・・・させ・・・っ!!」

と言ったまに向かって一歩踏み出した瞬間、居間のドアのところで誰かの短な悲鳴が聞こえた。

「トオルさん・・・!?!」

子猫の誤解を解くのが大変だった。(まあ、誤解ではないが)

俺の悩みのためなら、と今度は子猫が協力してくれることになった。猫神モードの子猫が、若干緊張した様子で俺の横に座る。

「私の猫耳とか、尻尾とか触っても良いんですが・・・慣れてないので優しくお願いしますね?」

「ぐ、すでにだいぶヤバイ・・・っ!!」

どうしたら良いんだ・・・このままじゃ・・・っ!!

「え、ええと・・・あ!そういうばこれ、愛撫の練習にもなりますよ!私がイクまでは是非とも執拗なまでに弄り回してください!!」

「・・・あれ?急に触りたくなかったぞ?」

恥じらいは重要だと思った。

冷蔵庫の前でたまが牛乳を飲んでいた。

「ふ。大きくなるといいな」

と迂闊にも勞いの言葉を掛けると、

「何が？」

若干キレられ口調で問われた。

・・・あ、ヤバい。身長、とか言ったら殺さる流れだ。

「えーと・・・」

何を言ったものか困っていると、たまたま通りかかった峰子のトルソーが目に映る。

「あーいや・・・胸が、かな」

「そんなに殺されたいの？」

うん。ま、そうなるよね。

デリカシーの無いタオルに、先ほどの罰としてコンビニにアイスを買いに行かせている間、

「ねえ、未だにトオルさんに襲われないんだけど、どうして?」

「女としての魅力が無いからじゃないの?」

子猫姉、峰子姉はそんなことを話していた。

「そんなことないよ・・・胸だってある方だし。ねえ、たまもそう思うでしょ?」

「私に振るな」

何の当て付けだ。

二人はまだ会話を続けていた。

「もしかしてトオルさんってホモなのかなあ?」

「まあ、これだけ迫っているのにおかしいわよね」

「実はクラスメイトの男子とくんづぼぐれつの羨まバトルを繰り広げているのかも」

あるいは・・・と峰子姉が深く考える。

「単に小児性愛者なんじゃ・・・」

「え?トオルさんペドなの!?!?たま、どう思う?!?!?」

「よし、姉妹喧嘩勃発だー！！」

これはいい加減に怒る。

ただいま、と俺はコンビニ袋をテーブルに置いた。

一番にたまが袋の中を覗き込んできて、俺は微笑んだ。

「・・・何？気味悪いわよ」

「すまん、何でもない」

分かるぞ、楽しみだったんだな。

「私にも一本ください」

子猫がアイスクャンディーを一本持つていく。

と、そこで峰子がおもむろに子猫に近付いて何かを耳打ちした。

うんうん、と頷きながら聞いていた子猫は、やがて峰子に感心するとアイスの袋を開けた。

入れ替わるように俺が子猫の隣に行く。

テーブルへと向かった峰子も袋からアイスを取り出した。何やら嬉しそうにしている。

「なあ、猫神ってアイス好きなのか？」

「どうでしょう・・・分かりませんね。でも、少なくとも私は好きですよ。ほら、バキュ ムフ ラとかの練習にもなりますし」

アイスを吸い付くように啜えて上下に擦る。

続いて舌だけでアイスを弄ぶ。濡れた氷菓子が淫靡に耀いていた。

「んふう・・・これが一番エロいアイスの食べ方です。私、今輝いてますか？」

「さあどうかね。行儀の悪さはピカイチだけど」

また峰子の入れ知恵だな。

どちらにせよ今後は棒状のアイスは買わないようにしようと思った。

犯人の峰子を探したが、居間には居ないようだった。

「たま、峰子どこに行ったんだ？」

「トイレ」

「・・・・・・・・」

嘘だろ・・・あいつ、アイス持ってたぞ？

アイスを食べ終わりテレビを見てみると、まだたまがアイスを食べていた。

「たま、早く食べないと溶けるぞ」

「ちゃんと計算して少しでも長くアイスを堪能できるように食べるの。知った風なことを言わないで」

と言った瞬間、アイスが瓦解し中の乳白色の液体がたまの口元に炸裂した。

「キャツ!!」

どうやらたまは練乳入りだということを知らなかったようだ。中に練乳が入っているということは、その分脆いということである。

うむ、やはり俺が予想した事態になってしまったな。

「うあゝ・・・ベトベト・・・」

「たまどうしたの?・・・え、口内射!??ちょっとトオルさんっ!ただけズルいです!!私にもトオルさんのください!!」

でもこのとばっちりは予想してなかった。

今日の夜は珍しく雷を伴う雨が降った。

部屋の窓を見ると、カーテン越しの光を視認した数秒後に雷鳴が轟く。自然の驚異を腹で感じられるほどだ。その後布団に入ったが、若干落ち着かない。

「別に雷は怖いわけじゃないんだがな・・・」

と、虫の知らせのような胸のざわめきを感じていた時だった。

「・・・トオル」

ドアを半開きにして中を覗くたまが居た。俺はドアまで寄ってたまを招き入れる。

「たま、どうしたんだ？もしかして雷が怖いのか？」

「ち、違うわよっ・・・ただ、今日はトオルの部屋に寝かせて欲しいだけ」

そういうたまは僅かに震えていた。抱きかかえた枕に顔を埋めているのが可愛らしい。

やはり雷が怖いんじゃないか。と内心思った俺は快く返事をする。

「いいぜ」

「ほ、本当！？じゃ、トオルは私の部屋で寝てね」

「・・・は？」

晴れた表情を作ったたまとは反対に、俺の顔には暗雲が立ち込め始めた。

「『は？』じゃないわよ。まさかトオルと一緒に寝るとか思ったの？何されるか分からないのに、そんなこと出来るわけが無いわ」

「え、でもそれじゃあ何のためにたまはここで寝るんだよ？」

「いいから早く行ってよ。この部屋、今夜は私の部屋だからね」

たまは部屋のドアに向かって俺の背中を押した。

「お、おい！待てよ！こんな一方的に

」

「子猫姉に、トオルに無理矢理連れ込まれた、って言うわよ」

「全力でお前の部屋に行かせていただこう」

なんて脅迫をしゃがる。

仕方がないので、俺はしぶしぶながらたまの部屋に入ってベッドの上で目を閉じた。

数分後、ドアが開いた気がした。気配が近づいてくる。

大方たまが一人ではやはり怖くなって戻ってきたのだろう。よし、ここは子供のわがままに付き合ってやるとしようか。

「仕方ないな。ほらこっち来いよ」

「え？それは願ってもない話ね」

ンバツ！と不意にたまが布団を取り払ったかと思ったら、目の前には青い髪の女が

「って峰子!？」

「うふふ・・・」

峰子の手には、玉が連なった感じの細長い器具が握られており、床には持ち込まれたのだろっ何に使うかよく分からない道具たちが置かれていた。

「ちょ、酷くアブノーマルな臭いがするんですけど!？」

逃げようとした所で、俺は胸を手で押されて再びベッドに横たわった。

峰子の口元には笑みが浮かんでいたが、目に宿る光が妖し過ぎる。

人生でこれ以上無いほどの悪寒がした。

「大丈夫よ。痛いのは最初だけ、すぐに良くなるわ」

「そそ、その手に持っているのは何だ!？そして今から一体何をするって言うんだあっ!？」

「さあ、お尻を出して。力を抜くのよ」

峰子は横たわる俺のパンツに手を掛け、勢い良く、そして愉しげに下した。

「うっ……だって、トオルの（買ってきてくれたアイス）だから全部きちんと味わんなきゃいけないって思ったんだもん」

「お願い、かつこ内の言葉入れて！」

その言葉だけだときつと誤解を生むよ？

「ふふ。トオルくとたまちゃんの間で愛を感じるわね。アイスだけに」

ほらね。

第十五話 木下ミルク一番搾り

夏休みもそろそろ中盤に差し掛かってきたころだった。

親は温泉旅行だとかで四日ほど家を空けるそうで、その間自炊しなければいけないようだ。

とりあえず今日はシチューにしよう、しかし食材が足りないというので買い物に行くことにした。

買い物があったついでに俺が行くことを願い出ると、当然のように子猫が連れ添ってきた。

「ついでに言って言ってみました、何を買いに行くんですか？」

「お前には関係無い物だ」

「それはどういう意味ですか・・・私はトオルさんの妻なんですよ？それなのにそんなことを言うなんて・・・はっ！まさか他に女が！？そんなっ、酷いわっ！私というものがありながら」

俺は言葉を切った子猫をゆっくりと眺めた。どこか興奮した面持ちで見返してくる。首を傾げて訊ねた。

「・・・満足か？」

「ええ、割と」

疲れる。

「あの・・・」

とスーパーの店内に入ると途端に、子猫が身をすり寄せてきた。

「手を繋がせていただきたいのですが・・・」

「何でだ？」

見ると腹部にはいつの間にか膨らみが。

子猫は囁くように小さく言った。

「これで歩けば確実に新婚夫婦に見られます。こつやっつて外堀から埋めていく作戦で・・・えへっ」

「そのスイカを早く元の場所に戻さないと、後ろの万引きGメンに突き出すぞ」

どつりで妙に鋭い視線を感じるわけだ。

家に帰ると、ちょうど峰子が家から出てきた。

「峰子、どうした」

俺が訊くと、

「頼み忘れた物があつただけど……もう帰って来ちゃったわね」

「何を買ってくれば良かったんだ？」

「実は牛乳が足りなくなつて……」

そう答えて少々困つた表情で俺を見た。

「うーん……仕方無い。もう一回行つて来るか」

俺は快くそう申し出たが、途端に峰子は落胆したような顔を向け、ため息混じりに言った。

「あーあ。駄目だよ、そこは『ふむ、じゃあ俺のミルクを使つてくれ！ズボン脱いでフーラを強要』ぐらいしないと」

「謹んで辞退する」

時間を掛けるのも憚られたので、結局子猫が買いに行くことになつた。

しかし、たかだか近くのコンビニに行くだけだというのに何故か十分経つても戻つて来ない。

「こんなに時間が掛かるなんて……何してんだ？あいつ」

そうして怪訝そうに玄関先で立ち尽くす俺に、隣に立っていた峰子は、

「コンビニの店員に万引きだの何だのと難癖を付けられて、それで取調べを受けることになり子猫はそのままその店員の餌食に……」

と語って、やがて視線を下げる。

「または帰り道に暴漢に遭遇し、茂みに連れ込まれてまるで獣のよう……ということもあり得るわね」

峰子は俺の股間から目を離さないまま、笑うところ言った。

「んー……どうやら寝取られ属性は無いみたいね。残念」

「あゝその期待は無いな」

もしあつたららどうするつもりだったんだ？

一度家の中に戻り、台所に立った俺はシチュー作りを始めた。三人で台所を使うには狭いので、たま一人が手伝ってくれることになった。

「レシピは……っつ」

「要らないわよそんな物」

たまはそう言って俺を制止した。

「え……でも俺、料理は苦手じゃないけどさ、レシピ無しじゃ無理なんだが」

俺が不安げに告げると、たまはおもむろに唱え始めた。

「シチューの作り方。

- 1．にんじん、じゃがいも、玉ねぎは一口大に切る。
- 2．かぶは皮をむいて4つに切る。
- 3．ブロッコリーは小房に分け、熱湯に塩を入れた中でサツとゆでる。

4．鍋にバターとサラダ油を熱して、焦げ目がつく程度に鶏肉を焼いて、塩、ホワイトペパーをふる。

5．鶏肉を取り出した鍋に1）を入れ、焦がさないようにしてていねいに炒める。

6．5）に小麦粉をふり入れて炒め、小麦粉に火が通ったらブイヨンを入れる。

7．鍋に鶏肉とかぶを入れ、塩を加えて、鍋底が焦げ付かないように時々混ぜながら、弱火でゆっくりと20分ほど煮込む。牛乳を少しずつ加えてさらに煮込み、味を整え、最後にブロッコリーを加え、ホワイトペパーをたっぷりふる」

「こ……これは……」

「私、一度見た物は忘れないの。一度料理関係の本を読み漁った事があったね、その時に覚えたわ。今のはあくまでもシチューの一例だから、他のが良いなら言って」

「天才少女!？」

IQ300越えらしい。

「たまちゃんって凄いでしょ?・・・でもね、欠点もあるのよ?」

そう言っつて峰子は、読んでいたカバー付きの本をたまに渡した。

「え・・・何?」

そう言いつつ、たまは本をめくる。

しかしその速度も尋常ではない。

めくる・・・というか、むしろ風を起こすためだけにパラパラしているみたいな感じだ。

現実に、たまの前髪が微かに揺れている。

「・・・??・・・っ!？」

「・・・ん?たま、どうし　　おわっ!」

読み終わったかと思うと、たまが顔を赤くして本を俺に投げてきたので、俺は訝しげにカバーを外してタイトルを確認した。

『言葉責め辞典　〜今日から貴女も女王様〜』

「・・・あぁ・・・」

会話は1000パターンを網羅。シーン別らしい。

そうこうしているうちに子猫も帰ってきて、シチュエーは完成した。夕飯の用意をし、食べ始めようかと思ったところで子猫が突然頭を下げた。

「本当に遅れてすみませんでした。搾乳に時間が掛かってしまっただんです」

「あいな、だからお前からは」

「駄目じゃない子猫！」

俺がつっこみを入れる前に、峰子が立ち上がって怒り始めた。

「私はそんな子に育てた覚えは無いわよ！」

俺はあまりの剣幕に、

「み、峰子、それくらいでいいだろう。子猫だって」

「私に無断で野外で搾乳プレイするなんて！ずるいわ！！」

「峰子姉、ごめん。でも私はどうしても自分を抑えることが出来なくて……！」

「……トオル」

たまが俺の上着の裾を掴んで首を横に振る。
その動作に、この話に口を出すべきではない、と俺は悟った。

「美味しいです！トオルさん凄い頑張りましたね！」

シチューを一口食べて、子猫は手放して俺を褒め称えた。

「頑張ったって・・・別に大した事ではな」

「こんなに大量の精を一日で・・・正真正銘の絶倫ですね!!！」

「牛乳お前が買いに行ったんじゃない」

えー、分かっててその興奮した面持ち？

部屋に戻ろうとしたところで、子猫に引き留められた。
どうやら勉強で分からない所があるそうで、俺は子猫の部屋まで赴いた。

問題集を広げ、ここが分からないんです、と指を差す。

「それはだな・・・この公式を参考にしながら解いてみる」

「えへへ・・・はい！」

何故かウキウキしている子猫の笑顔が眩しすぎたので、俺はあたりを少し見まわした。

ぬいぐるみこそ無いが調度類が汚く見えない程度に程よく並び、意外と女の子らしい部屋の装いである。

そうか、こいつもことう見ると普通の女の子だな・・・。

と、俺はそこで奇妙な貼り紙を見つけた。

『きそたいおん』という縦が温度、横が月日になっているグラフだ。見ると最近はずかしく下がったグラフの値が上昇を始めていて、そのターニングポイント付近の日にちが赤い丸で囲まれている。

「・・・・・・・・」

今日のところにも丸が付いていた。

こ、これは・・・まさか・・・・・・・・。

そんな俺の焦燥など気にもせず、ぼそつ、と子猫が呟く。

「ふふ、絶倫か・・・これは確実かな」

おいおい・・・冗談なんだろう？

夜、暑くて眠れない俺は麦茶でも飲もうと階段を下りていた。

居間に電気が付いている。どうやら誰かが居るらしい。

「こんな時間に誰が・・・」

と思いドアを静かに開けて中を窺うと、

『スペースアンティノウスめ……こんな技を隠していたとは……
っ！』

『ふはは、星座戦隊オリオナー。貴様らはここで朽ち果てるのだ！
』！

緊迫した面持ちでたまがテレビを見ていた。

これは……日曜日の朝に放送している戦隊モノだ。
ということは、録画したものを見ているのか。

「だめ……オリオナーが……」

涙目と握り拳がセットになっている様子を見るに、どうやらかなり
好きなようだ。

しかも、録画をして夜中に見るとはなんとという厳戒態勢だろうか。
その必死なまでの隠蔽工作がより子供らしさを強調するようで、

「今度DVD買ってやるか……」

いじらしさを感じた俺は、そのまま居間を離れた。

自室のドアの前に立つと、ドアノブから妙な気配が伝わってきた。
誰か……居るのか？

しばし考えた後、俺は子猫の部屋へと向かった。

俺が去った後の部屋内。

「えへへ・・・さつきは上手くいかなかったけど、何としても今日こそはトオルさんと・・・！あ、少し濡らしておこ」

子猫がベッドの上で俺が帰ってくるのを虎視眈々と待ち受けていた。

こじやって、俺は日々難を逃れる。

今日のボツネタ

買い物があったついでに俺が行くことを願い出ると、当然のように子猫が連れ添ってきた。

「ついでに言って言いましたが、何を買に行くんですか？」

「お前には関係無い物だ」

「・・・となるとアフターピ ですね？」

「頭大丈夫ですか？」

最近この子の将来が心配。

第十六話 夢精というより性夢

これは夏休みも終わりに近づいていた頃の日常の話。

<木下トオルの場合>

いつもの時間に、俺は目覚めた。

周りを見回し、しかし子猫が居ないことに気が付く。

「ん？珍しいな」

と、安堵しつつ部屋のドアに向かっていくと、いきなりそのドアが開かれた。

「トオルさん！」

「子猫・・・？どうしたそんなに慌てて」

青ざめた顔の子猫に、俺はそう訊ねた。

「トオルさんとの初夜の後、生理が来なかったんです。そこで調べてみたところ・・・妊娠してしまいました！・・・どうしましょう！？」

「心底良かった、と俺は思う」

全て夢でな。

「・・・む！確かに、妊娠中だからこそそのプレイが可能になったとも言えますね！！」

「その発想の転換は否定する」

今日もひどい一日になりそうだ。

<猫神子猫の場合>

ある日の朝、なかなかトオルさんが襲って来ないので、峰子姉に相談してみた。

「押して駄目なら引いてみな。人間の諺に倣ってみるのはどうかしら」

「なるほど・・・うん、やってみる！」

私はそのままトオルさんの部屋に赴いた。

よし、丁度良く出てきたトオルさんに、時間的余裕を与えずに実践へと入ります！

腕の裾と襟元を掴み、まず腕を突き出す形で押す。

「押して駄目なら」

続いて腕を引いてトオルさんの重心を前に寄せると、私は体を反転させ腕を引き込みながらトオルさんを腰に乗せるようにして、そのまま地面へと投げた。

「引いてみな!!」

後で知ったが、これがいわゆる一本背負いだった。

上手く受身が取れずにトオルさんはしばし呆然としていたけれど、時雨茶臼の体位になっていることに気が付いたようだ。

「次は寝技に入らせていただきます！」

「ジャンルの垣根を跨ぐのは許すけど、俺には跨るな」

無視して揺する。

「殴りたいのか？」

「ええ」

「肯定すんなや」

「えへ」

今日もすばらしい一日になりそうだ。

<猫神峰子の場合>

私は猫神家の長女峰子。一応体育教師である故に、夏休み中も忙しい。

「今日はちょっと学校で会議があるから」

と言いき残り家を出た。

妹たちの面倒をみることも大事だが、生徒の可能性を引き出し、能力を開発することは教師である私の使命だ。

「ふふ……じゅるり」

そして後ろの穴を開発するのも私の使命だ。

<猫神たまの場合>

私は猫神たま。猫神家の三女だ。

将来はスタイル抜群な猫神になるだろう。

「ん？おい、たま。何か落としたぞ」

家の廊下を歩いていると、タオルがそう言って落とし物を拾おうとしゃがみ込んだ。

その瞬間、私は気が付いてしまったのだ。タオルのしゃがんだ時の身長が、私の直立時の身長よりも高かった事に。

「く……タオルの馬鹿あ！！」

「え、ちょ、たま！何処行くんだよ！？これ落としてるって！！」

だが今は身長がコンプレックスだ。

<鏡京子の場合>

『トオルと子猫の顔が互いに至近距離で存在していた。太陽の光はもう窓から差し込んできていなかったが、それでも緊張に強張っている様子が伝わってくる。』

「子猫・・・もう流石の俺でも我慢できない！お前が欲しい・・・
っ！」

珍しくトオルが子猫の上に乗る形であった。普段とは違う、明らかに意気を感じる。

「トオルさん・・・でも、私達は従兄妹同士で」

「そんなものは大した障害じゃない！問題は、お前がどうしたいかだ。お前の気持ちを聞かせてくれ！」

「私の気持ち・・・？」

再度自分に問いかけ、子猫はしばし逡巡した末に答えを口にした。

「トオルさん、お願いします・・・来て、ください」

その台詞と笑顔は、トオルの強張りを解いた。

「・・・子猫」

そして二人は、夕闇の中で遂に一つになったのだった。』

「今日はこんなことがあるんじゃないかと思って電話したんだ」

「もしその状況だったとしたら、鏡。お前は邪魔するために電話したっていいのか？」

「ううん、むしろ参加したいって感じかな。もしくは近くの公園で野外プレイしてる最中とかだったら面白いなって思うし。まあ私自身は今、トオルくんをオカズにオニー中なんd」

「あーごめん、もう電話切る」

鏡京子の趣味は妄想である。

<秋元千鶴の場合>

木下トオルが昼ごろに部屋の窓から外を見ると、玄関に見知った女性立っているのに気が付いた。

(あれ・・・千鶴先輩じゃないか?)

生徒会長が私服を装い、木下家の玄関に立っているのである。

彼は瞬時に悟った。あれは何か良からぬ事をシに来ているのだ、と。やがてチャイムがなり、しかし彼はそのまま部屋の窓から秋元を見下ろしていた。

今、家に彼以外に誰も居ないのが救いか。

「ん・・・居ないのか？」

秋元はそう呟き、もう一度インターホンを押してみたが返事は無い。

「おい、木下ー」

呼びかけてもみだが、やはり返事は無い。

（頼む・・・そのまま帰ってくれ・・・）

彼は心の底から願った。しかし、

「・・・・・・・・・・ふ、放置プレイか・・・・・・・・・・悪くないぞっ
「！」

（勝手に興奮しちゃったよ・・・！！）

状況は悪化するだけだった。

<葛西由紀の場合>

木下トオルの放置プレイに葛西が興奮していたところ、葛西が現れた。

（由紀先輩？だがあの人なら連れ帰ってくれるかも・・・）

そう思って、彼は引き続き見下ろす。

「千鶴。こんな所で興奮しちゃ駄目じゃない」

「し、しかし木下が・・・」

顔を紅潮させている秋元に、葛西は一つ溜息を吐いた。

「ふう・・・仕方ないわね。今日の調教はここで行うわ」

(まさかの事態に・・・!!)

秋元の悦びの喘ぎが窓を通して流れ込んでくるので、彼はとりあえず耳栓をして枕で頭を抱えた。

<秋元千鶴と葛西由紀の場合・その後>

俺はしばし耳を閉ざしていたが、秋元と葛西が去る気配が無いので玄関のドアを開けた。

「まったく、何しに来たんです？」

「勉強してたんだが、この暑いのに停電してしまつてクーラーが動かさなくてな。それで落ちて着いて勉強できそうな木下の家に来たという・・・ん！あっ！？き、強は・・・っ!!」

「素直に調教の一環で来たって言うたらどうなんです？」

さっきからモーター音がうるさいんだよ。

<秋元千鶴と葛西由紀の場合・その後2>
やがて、秋元は火照った顔で俺を見つめた。

「た、頼む木下。中に入れてくれ・・・！このままでは・・・ああ
っ！！」

「お断りします。家の中が汚れますし」

そうしてドアを閉めようとすると、葛西が引き止めるように言ってくる。

「けど木下くん、挿し換えればどっちでも楽しめるんだよ？」

「あんたは何の話をしてるんだ」

ちなみに今はどっちだよ。

「アルよ」

いや、言わないでいいけどさ。

<塩谷可南子の場合>

「はぁ・・・まったく、教師というものは学校が無い夏休み
中でも出勤日が存在する厄介な職業だな・・・」

この日、塩谷可南子は珍しく職員室で事務的な作業に没頭していた。とそこに現れたのは木下トオル。峰子に弁当を届けに来たらしく、弁当を渡すとすぐに踵を返した。可南子は帰りがけの木下に声を掛けた。

「よう木下。今日の朝は良く抜けたか？」

「今日は何ですか？まず挨拶から悪意を感じますが」

「大丈夫だ。これくらいで正常なんだからさ」

「・・・ほう、学校でAV見てる奴が正常だと？」

「ふ、これはほれ、誰かにバレるのではというのが堪らないんだよ」

「・・・・・・ほう？」

「蔑むなよう！欲情して濡れちゃうじゃん！！」

「どうしてこの学校はあなたを解雇しないんですかね？」

この学校の七不思議の一つである。

<おまけ 木下トオルの防衛事情>

かつて、俺の部屋のドアには鍵が掛けてあった。それは子猫を部屋に入れないための仕掛けだ。

しかし、ドアの鍵を掛けて寝た次の日の朝、

「・・・何処から入ってきた」

横には全裸の子猫が添い寝していた。

「窓からです」

そう言ったので、俺は窓にも鍵を掛けるようにした。その頃は初夏で、暑くなって来ていたが仕方がないと諦めた。しかし、窓の鍵を掛けて寝た次の日の朝、

「・・・今度は何処から入ってきた」

やはり横には全裸の子猫が添い寝していた。ていうか暑苦しくて夜中の時点で気が付いていた。

「ピッキングです」

そう言ったので、俺はドア・窓の両方にピッキングに強い鍵と警報機を取り付けた。これで、万が一完全に防ぐ事は出来ずとも、入ってくる前には気が付けるだろう。

しかし、強固なセキュリティで防護したはずの次の日の朝、

「・・・」

問う気すら起きなかった。やはり子猫は俺の横で、そしてこれまたやはり全裸で寝ているのだった。さらにこれまたやはり夜の時点で判明していた。

「最初から部屋に籠っていました」

別に訊いてない。

こうして次の日から、俺は鍵を掛けなくなったのだった。

<今日のボツネタ>

ちなみに今はどっちだよ。

「千鶴に入っていると見せかけて、実は私のちt」

「音は千鶴先輩の方から聞こえるというのに、それはそれは大層なイリユージョンですね」

「ふふ、種を確かめてみる？もしくは種の中にd」

「はい閉幕」

ドアを閉めた。

第十七話 騎乗の空論

夏休みが明けた。

しかし、変態たちに掻き乱され切った夏休みの終焉は、ただ場所のみを学校にシフトチェンジする号令でしかなかった。

「おはようトオルくん」

教室に入ると鏡が声を掛けてきた。

「よお、鏡」

「おはようございます!」

元気に挨拶したのはもちろん子猫の方だ。

「子猫ちゃんは今日も元気だねえ。新学期の準備は出来てる?」

「はい!」

「忘れ物は無い?」

「大丈夫です!何なら確認してもよろしいですよ!」

ずいつ、と鞆を鏡に突き出す子猫。

ん?新学期の準備って、そんな大袈裟な物あったか・・・?
鏡は遠慮無く中身を探る。

「んー・・・まずは性書」

「珠玉のエロ本はまさにバイブルオブセックス！保健の教科書も真つ青！」

「次にコンーム」

「性病から精に至るまでダブルブロック！妊娠は計画的に！」

「そしてピンクーター」

「したたかな淫女の身だしなみ！授業中に限界に挑戦しろっ！」

「・・・・・・・・」

最近転校を真剣に考えている自分がいるのは内緒だ。

何はともあれ、二学期が始まった。始まってしまった。

私は猫神たま。猫神家の三女だ。

この日の水泳の授業が終わり、更衣室で水着から制服に着替えていた時のことだ。

「やだ、ブラ変えた？もしかして胸大きくなったんじゃない？」

「うん。実はCからDになったの」

「すごっ！なににー成長期真っ盛りー!？」

クラスの女子の会話に耳をそばだてながら、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私はブラの必要が無い自身の胸を、黙って見下ろしていた。

女子が遅れて体育の授業から戻って来た。女子は水泳だったので、着替えて遅くなったようだ。

ふとたまを見る。俺は何か違和感を感じた。

「あれ・・・？」

他の女子生徒と見比べてみて、ようやく違和感の正体に気が付いた。たま、どうやら胸のリボンを着け忘れていたようだ。まったく・・・頭が良いくせに、ああいう所は抜けている。それを指摘しようとたまに近寄った。

「おいたま、お前・・・着け忘れて

」

そこで言葉を切ったのは、たまの眼光があまりに鋭かったからだ。

「・・・着け忘れてるって？違うわ、私には着ける必要が無いの・・・何故なら貧乳だから！そもそも着けてないから何？ノーブラで何かアンタに迷惑掛けたの!?!?言ってみなさいよ、ホラッ!！」

「……………っ!？」

何か理不尽にどやされた!？

そして何気ないカミングアウトも生々しい哀しみが……………!

昼休みには秋元や葛西が教室に訪れてきて、一緒に昼食を取ることになった。

「トオルくん、今日は自信作なんだ。ちょっと試食してみてよ」

「良いのか?じゃあ一つ」

鏡に勧められ、俺は鏡が差し出したから揚げを食べた。

「ん……………うん、うまいな　　って何だよ、そのいつになく

真剣な顔は」

「……………媚薬の効果どれくらい経ったら出るかな、と思って」

「ブツ!！」

く、何だか体が熱く……………っ!!

「木下、これを」

秋元が声を掛けてきたと思ったら、フォークに刺さった果物が顔の近くに迫っていた。

「何です？コレ」

「マンゴーだ」

「そう……ですか」

「……マンゴー、だ」

分かったから頬を染めるな。

葛西を見ると、割と立派な重箱の中にアワビが入っている。そんな物を弁当として持つてくるか……？と思いながら見ていると、

「トオルくん、私の食べる？」

「え、いやでもそれはちょっと」

「私では食べ切れないのよ」

「はぁ……それならいただきます」

俺が頷くと、笑みを湛えた葛西は椅子に座ったまま股を開いて言っ

た。

「はいどーぞ」

「……………」

……………

……………

「子猫、食べないのか？」

子猫は弁当に少しも手を付けないで苦しそうな顔をしている。
体調でも優れないのだろうか。

「いえ、それが……………」

「おい大丈夫か!？」

「大丈夫です…………ただのつわりですから」

「ん、そっか。お大事になー」

「トオル、つつこみ！」

面倒くさがったらたまに怒られた。

「んう……く」

「どうしたたま、弁当に苦戦してるのか？」

今日の弁当は峰子で作ったものなので、いつもと勝手が違ったのだろうか。

どうやらフランクフルトが上手く食べられない様子だ。

「太すぎて口に入らないのよ、これ。フランクフルトを一本まんま入れるなんて……峰子姉は何を考えているのかしら」

「……ああ、本当に何を考えているんだろうな」

俺はそのまま職員室に向かった。

弁当には他に、二つのうずらの卵がフランクフルトに寄り添っていた。

家の風呂に入っていると、久々に子猫が乱入して来た。勢い良く湯船に滑り込んで言う。

「お背中流しますー！」

「フン、残念ながらすでに上がる所だよ」

と俺が立ち上がるころとすると、

「ま、待ってくださいっ!!」

子猫は俺を掴んで引き止めた。

「・・・離せ」

「嫌です。離しません」

さらに強く掴んでくる。

「だから離せっつて」

「トオルさんが頷いてくれるまで絶対に離しません」

ぎゅっううううううっ!!

「ちょ、ホントに離してお願いっ!!」

千切れるうッ!!

夜の11時頃、来客があつた。鏡だ。

玄関のドアを開けると、何故か英語で話掛けてきた。

「You're male! By the way, what

am I sex? (君は男だよね!ところで私の性別は何でしょう?)
「」

「You're male, too. (お前も男だろ)」

「Oh! Really? (ええ!本当に?)」

「Sure. (当たり前じゃないか)」

「Wait, I'm bitch! (待って、私はメス犬だよ!)」

「I don't know what you mean. (何を言ってるのかさっぱりだ)」

門前払いした。

「はあ……」

テレビを見ていると、突然子猫姉が溜息を吐いた。

「どうしたの?子猫」

峰子姉が子猫姉に近寄って訊ねた。

「あ。マタニティブルー?」

「何故産後うつ．．．はっ!?!」

峰子姉、どうして私のことを見ているの？

「で、どうしたの？子猫」

「その．．．色が気になって」

「色？」

「肌の？」

私の問いに、子猫姉は首を横に振った。

「毛の色。私ってほら、三毛猫だから色がまばらでトオルさんに嫌われちゃうんじゃないかって思って」

髪の毛を見る。見慣れているからか、もしくは私も似て色がまばらだからか、別に変に感じない。

「でも、それが魅力の減退を助長するとは言えないんじゃない．．．」

「そうそう。それに、ちょっと汚く見えた方が燃える、とも聞かれますよ子猫」

「そうなのかな．．．」

「今度、顔面騎乗でトオルくんの反応を試してみなさい」

「うーん、じゃあそうしてみようかな」

「え、顔面って・・・二人は何の話してるの？」

「陰の話だけど？」

「Oh！我、関せず」

知らなかったとはいえ、そんな話に参加していたとは・・・今さら他人の振りをしたくなかった。

「たま、まだ全然下の毛生えてないしね」

「黙れ」

何故それを子猫姉が知って・・・峰子姉か！

私が怒って玄関先に行くと、トオルが鏡京子と話していた。

「あれ？たまちゃんだ。やつほー」

「・・・どうも」

機嫌の悪い今、あまり会話に参加しなくなかったのだが、向こうから話し掛けてきてしまったのだからしょうがない。

「ってトオルくん、駄目だよ？」

「駄目って・・・何がだ？」

「たまちゃん、早く寝かさないと成長しないじゃない」

その発言に私は力チンときた。

「お、大きなお世話だ！」

「えー、小さなお世話だよー。たまちゃんだから」

「上手く言ったつもりかー!!」

馬鹿にするなー！と鏡に向かって拳を振り回すが、頭を押さえられて哀しく空を切った。

夜中の0時を回った頃、俺は水を飲んでから寝ようと思いつき、居間に向かった。

二階には誰も起きていない様子はなく、明かりも点いていなかった。だが居間には電気が灯っており、テレビの前にはおそらく戦隊モノであろうと思われるDVDが置いてある。

トイレを見ると、誰かが入っているのか微かな明かりも見えた。

「・・・たまだな」

俺は親切心から廊下の明かりを灯すと、コップに水を注いだ。すると、いそいそしい足音と共に、たまが居間に入ってきた。

「ト、トオル！明かり点けたのアンタ！？」

「ああ、怖いだろうと思っ

」

「今日は頑張ってたのに・・・アンタまで私を子供扱いかぁッ！」

「な、何怒ってるんだよ！」

珍しくマジギレ状態で殴りかかってくる。・・・まあ頭を押さえて防ぐが。

「うるさいうるさい！猫神の顔も三度までなの！」

「いや、その三度分は絶対他の奴が溜め込んだらろっ！！」

しかし俺の反論空しく、結局彼女の怒りを静めるのには小一時間掛かった。

<今日のボツネタ>

私は猫神たま。猫神家の三女だ。だが貧乳であることがコンプレックスだ。

その日、家に帰ってきた私は上半身裸で自室のベッドの上に座っていた。

もちろん服を脱いでいるのは理由がある、それは本に載っていたバストアップ法を試すためだ・・・

「たしか・・・こう、下から寄せ上げていく感じで・・・」
が、

「っつてもそもバストが無い!!」

嘆き叫んでしまうほどの胸であった。胸のところにあるのは薄い筋肉と皮と骨だけか。

と、その瞬間ドアの方から音がして、見るとトオルが口をわななかせてこちらを見ていた。

「・・・・・・・・す、すすすすまん・・・っ」

「あ、ちよっ!」

脱兎のごとく、トオルは逃走した。

その後トオルを追いかけて部屋のドアを開けて中に入ると、膝を抱えて蹲っているトオルを発見した。

「・・・・・・・・ああ・・・っ!!」

まるでこの世の終わりの様な顔でこちらを見ている。

「・・・・・・・・何で私の部屋に?」

「ち、ちよつと要件があつたんだが、ノックをしようとしたら・・・さ、叫び声が聞こえてきて・・・」

「それで中を覗いたところ・・・」

「お前が・・・・本当にすまなかつた・・・!」

私は溜息を吐いた。

よく分からないけど、反省をしているようだし今回は許してあげよう。

それに、バストアップ法を試しているところは見られてないようだし。

「でも、どうしてそこまで怯えているの?」

「まさかあんなに真つ平らだとは思わなくて・・・バストアップ法にまで頼っているのにだぞ?・・・俺は、そんなお前の将来が本当に怖いんだ」

「失礼過ぎる上に最初から見てるじゃない!」

問答無用で殴った。

第十八話 それはセクハラです

休日に俺、木下トオルは猫神姉妹達と街で買い物をしていた。

歩いていると、たまが俺の上着の裾を引っ張る。

「ね、ねえトオル。喉乾いてない？」

たまがソフトクリームのお店を何度かチラ見しているところを見ると、欲しいようだ。

「ん・・・そうだな。何か飲みたいかも」

「じゃあさ、ソフトクリーム買わない？・・・べ、別に私はいいけど、トオルが喉渴いてるって言うんだからしょうがなく・・・だけどね」

俺は彼女の意思を汲み取り頷く。

（だが、ソフトで果たして喉を潤せるか・・・）

まあ無理があるのは本人も承知だろう、と俺は言及を止めた。しかしあまりにも微笑ましい子供らしさなので、笑みだけは隠せなかった。

四人並んでベンチに座って、ソフトクリームを食べていた。

すると私の不注意で子猫姉の胸元にソフトクリームが付いてしまった。

「あっ、子猫姉ごめん・・・！」

どどどじよづ。こゝ、こゝいうときは

『私が舐め取るから動かないで！』

そして子猫姉の胸に付いたソフトクリームを丁寧に舐めていると、

「なんか子供すっ飛ばして赤子って感じだな・・・」

・・・ボソツとタオルに言われた。』

なんて展開になりかねないので、それは却下。
だがふき取る物が無い。うーん・・・

「おい、子猫。せっかくだからそっちのも舐めさせてくれよ」

「セ、セクハラ！？やった！たまありがとう！」

「え、何でセクハラ？てか、そんな邪な勘違いで嬉しそうな声を上げるな」

「・・・タオルの馬鹿」

「何でたまが怒るんだよ！？」

トオルのせいで、結局私はボケに加担することになってしまった・
・。

ショッピングセンター内の女性物の下着売り場にたどり着くと、子猫が俺の腕を引いて中へと連れ込んだ。

「二人は先に行ってー」

「子猫、試着室内が勝負どころよ。それじゃ頑張つて」

「峰子、何を言つて　　ね、子猫離せつて！」

にわかに心拍数が上がる。

「待て待てつ、本当に待て！俺がここに居たら変だろつが」

「大丈夫です。私はすでに変態ですから」

「それが何か？」

やっぱりいくらいに平常心になれた。

何とか隙を見て子猫から逃げ出したものの、ショッピングセンター

内は意外に広くて迷ってしまった。

「あいつらどこに行ってた・・・？」

と探していると、峰子が新しい私服を買いたいのか短めのパンツを見ている。

「峰子」

声を掛けると、峰子は俺をちらつと見て残念そうに肩を空かした。

「勿体ないことするのね。試着室でのプレイは最高に興奮するっていうのに」

「お前いつもそんなことしてるのかよ」

「こっそり二人で入って、声を出さないようにするんだけど、気持ち良すぎてつい喘いでしま」

「ここ、公衆の面前ってこと理解してる？」

「訝しんだ店員に声を掛けられた時に動かれると、達してしまいそうなくらいに」

「無理に話を膨らませないでくれるか？」

「でもやっぱりばれてて下着とかの買い取りになっちゃうのが困っちゃうわ」

なるほど、俺の返答はどうでもいいみたいだ。

「それにしても、お前が半ズボンを見つめるほど好きだったとは」
いつも峰子は長い裾のジーンズやらスカートやらを穿いている印象
だったので、どうにも半ズボンがピンと来ない。

「ふふ、これでも好きなのよ？最近は特に気になってるの」

「へえ、でもどうして今なんだ？もう夏休み終わっただろう？穿ける期間が少ないぞ」

「大丈夫よ、こういうのは元気さの象徴みたいな物だしね」

「そんなこと言っても、風邪引いちゃったら峰子も大変だろ？」

「・・・そうね。確かに今の私は教師だものね・・・」

俺の説得が功を奏したのか、峰子は何度か深く頷いた。

教師としての自覚も少なからず出てきているようで、何だか俺はい
るんな意味で安堵した。

「風邪を引かれたら、生徒とのただれた関係を疑われてしまうかし
ら・・・」

「・・・!？」

「けど皆元気の良いシヨタっ子だから大丈夫よね？」

「……!?!」

あ!?!よく見たらこの半ズボン男物だ……っ!

峰子からも逃げ出した俺は、その後一応ゲームセンターに寄ってみたが、そこでたまを見付けた。

「おい、たま」

声を掛けようとして気が付いた。

たまが物凄い形相でUFOキャッチャーにへばり付いているのに。

「星座戦隊オリオナー……」

「……」

固まっていると、そのうちにたまが俺の方を向いた。

「……」

「……」

しばし見つめ合った後、ふい、とたまは再びへばり付いて呟き始めた。

「星座戦隊オリオナー……」

「それはもう、欲しいっ、て言ってるよ!？」

無償の愛とはなりふり構わないってことなの？

ウイイイン、ガシャン。

「ほら、何か取れたぞ」

片手で持てるくらいの人形を渡すと、たまはそれを恐る恐る受け取った。

「これ、オリオライズ持ちのオリオレット・・・!」

お、よく分からないが彼女のお気に入ったようだ。
そうして嬉しそうに人形を抱きしめていたが、

「あ!いや、これは・・・か、勘違いしないでよ!!こんな子供じみた物もらったところで嬉しくなんてないんだからっ!! UFOキヤッチャーにお金をかけるトオルが馬鹿みたいで面白かっただけよ!」

「・・・ああ、そうなんだ」

「・・・で、でもお礼言わないのはかわいそうだから言っ
てあげる、・・・あ、ありがとう」

「おう」

「でも変な勘違いはやめてよね！トオルのことなんか全然何とも思っていないだもん！！」

「ツンデレ面倒くせえな！」

だが何故かもどかしい・・・っ！

猫神姉妹たちと合流した時にはすでに各々の買い物は終わっていたようで、俺たちは家へと向かっていた。

「お前ら一体何を買ったんだ？」

「ふっふーん。教えませんよ、トオルさん」

「何だよ、荷物持ちまでさせといてそれは無いんじゃないか？」

「それよりもトオルくん。先ほどのたまちゃんとのやりとりをカメラに収めたんだけど、生徒会長さんに渡しても良いかしら？」

「それも無いんじゃないか？」

何？援助交際とかロリコン疑惑とかのゴシップ記事にでもしたいの？

深夜0時ごろ。この時間帯はたまがテレビを見ていたり、子猫が部屋に入ってきたりと、案外いろいろと起こる時間帯である。

俺はある日の深夜、トイレで用を足し部屋に戻ろうとしていた。

・・・何やら声が聞こえる。テレビかラジオの音だろうか。

子猫は俺の部屋、たまは居間に居るだろうから・・・この場合は峰子？

峰子の部屋の前に行くと、声の出所がここであることが判明。

とりあえず耳をそばだててみる。

「・・・・・・・・・・あッ！い、んんっ！！もうキちゃっ！！」

「・・・・・・・・・・」

おい？これ、まさかオ・・・

「トオルくんに見られながらイっちゃっ！！」

しかも俺が居るのバレてるっ・・・・・・・・！！？

「っーか見てねーよー！！」

まさかドア越しのっっこみをさせられるとは。

朝。

「起きて……起きてください……」

そんな呟きで俺は目覚めた。

「ん……もう朝か」

「あ、トオルさんは寝てて良いですよ」

ささ、と俺を再度横たえる子猫。

「へ？」

「あー、えつとですね。お母様に『トオル起こしてきてあげて』って言われましたので、オンオンを起こして差し上げているんです」
ズボンは半脱ぎの状態。こいつ本気だ。

「一部、都合の良い解釈が入ってるぞ」

「えー？お母様、きつと込みの発言だったと思いますよ？」

「抜きだよ」

「あ、はい分かりました。今日はニーソ穿いているので足キでいいですか？」

「もう色々と履き違えてるよお前は」

いいから早くベッドから下りろ。

今日は週に一回の保健の授業があった。
担当教師は人員不足で塩谷可南子となっている。

・・・保健室はどうした。

「えー・・・で、エイズの予防としてもコン　ームの使用は重要だ。
覚えておくように」

「・・・・・・・・」

ふーむ、流石に堂に入った説明だ。日頃から使っているだけのこと
はあるな。

「・・・おい木下。全部聞こえているぞ」

「は？俺、口に出してました？」

全部な、とこくりと頷かれた。

「あ・・・すみません、かなりの名誉毀損ですね。本当に申し訳な
い」

「そつだぞ。私はコ　ドームは使わない。明らかに誤解している」

「えー怒るトコそこなんだ？」

てか自分で重要とか教えといて使わんのかいつ。

うとうとしていると、可南子に起こされた。

「まったく・・・ちゃんと授業受ける」

そうして、こつんと軽く頭を殴られた。

寝起きでちよつとイラついたので、生意気に反抗してみた。

「・・・今の、体罰じゃないですか？」

「え？ス　ンキングとかが好みか？」

「それはセクハラです」

駄目だろこいつ。

居間でくつろいでいると、不意にくしゃみが出そうになった。そこでちよつと近くにティッシュ箱があったので適当に取って使ったが、取りすぎて何枚か余ってしまった。

「うーん、余ったのどうしよう・・・」

困り果てていると、

「もー、資源を無駄遣いしないでください、トオルさん」

「む、確かにそうだな。すまない」

俺はそうして彼女に頭を下げようとし、

「それにオニーの時とかに使うんですから、大事にしてくださいね？」

子猫にそう言われ、俺は決してそれ以上頭を下げることにはなかった。

ふと家の廊下に出ると、トオルさんとたまが何かを話していた。

私は物陰に隠れて耳をすませる。

「……もしこれが……だったら私アンタ殺してたわよ」

「すまん。でも流石に……あんな……なのは俺も勘弁だし」

「……はまだ大丈夫だったけど、次は……ね？」

「はい、覚悟しておきます」

「……ああ、なーんだ、

「スカトロの話でしたかー。流石にその一線は越えにくい様子です

ね・・・分かります」

「残念だがトイレにおける流し忘れの話だ」

「そして何故、暗に子猫姉はすでに超えているかのような発言を・・・」

・・・あれ？

またふと家の廊下に出ると、トオルさんとたまが話していた。

私は再び物陰に隠れて耳をすませる。

「たま、この・・・どこに入れりゃいいんだ？」

「それは・・・この小さな・・・の方に」

「これは？」

「こつちの大きな・・・とかで壊れるといけないから丁寧に・・・てね」

「と、トオルさんっ！私の　にも入れてください！！！！もう我慢できませんっ！壊れるまでお願いします！！！」

・・・ん？あれはこの前買った、歯ブラシとかを挿しておくための・・・

「分かんないなら話に入ってくるな!!」

「そして何故、すでに興奮を・・・!?!」

・・・あれれ？

夜になると、いつものように子猫が俺の部屋に入り込んできた。

「・・・で、どうして私がベッドで、トオルさんが床で寝てるんですか？」

「良いだろ。ベッドあてがってやってんだから」

「そうじゃなくて！私はトオルさんと寝たいと、夜のメリーゴーラウンドに乗ってめくるめく快感へのアバンチュールをしたいと・・・はつきり言えばセツ スしたいです」

「・・・二択ある」

「中か外かですね？」

「違う」

ドヤ顔で言っな。

「出されるか出ていくかだ」

「射（だ）されるか射（で）てイクか！？遂にイベント発生で
すか！！？」

「もう部屋からつまみ出す！」

言い方も悪かったが、それは無い！

つまみ出そうとしたら、かなり抵抗された。

「ま、待ってください！せめて顔面騎乗だけでも……くっ！」

「こ、こいつ猫神モードに……！」

びょっ

どん

どせ

ぎゅ

「……………」

「はぁ……はぁ……どうですか？」

気が付けば、俺は子猫の股の間に顔を挟まれ仰向けになっていた。
てかこいつ……穿いて……な……い……

「三毛猫なので下の毛の配色が変ですみません。でもその奥にはピ」

ンク色の綺麗なm・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・あれ？トオルさん？」

「・・・・・・・・・・」

「ああー！気絶してる！？締め付け過ぎました！・・どうしようっ、じ、人工呼吸した方が良さそうですかっ！？それとも」

朝起きると、俺はその夜の記憶を失っていた。

<今日のボツネタ>

たまが下着売り場に差し掛かると、中に入っていった。俺も続いて中に入る。

「トオル、何で来るのよ？私ブラ買いたいんだけど」

「つか、お前必要ないだろ」

「あ、あるわ！確かにぺったんこだけど、パッド使えば・・・ってそんな見栄を張りたくないわよ！！」

「なら別に買わないでいいだろ」

「でも買わないと馬鹿にされちゃうし・・・けどこの胸で買う

のは……」

「どうやら、何かもう一つ後押しが必要そうだな……」

「……あ、そうだ！野球拳のときに一枚分増えるしさ、やっぱ買った方が良くないんじやないのか？」

「何それ？馬鹿じゃないの？」

（……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7330o/>

木下くん家の工口猫神さま

2011年10月26日10時05分発行